

思切つて、「奥さん、濟みませんがね、乾いた襦袢の空いたのがないでせうか」かう言つて、細君が持つて来て呉れたのを借りて、其儘立つて玄關の二疊に行きにかゝると、

「そこで好う御座んすよ、敏子さん。」

『でも』

顔を赧くして、馴れない子供を扱ふのを見られるのがさまりが悪いといふやうに、其儘三疊の方に行つた。

子の泣聲が其處から聞えた。

暫くして襦袢を取換へて出て来たが、子が猶泣き止まぬので、今度は胸を少しひろげて、張つた乳房を恥しさに出して、それを子供の小さい口に當て、やつた。子は容易に吸ひつかなかつた。

「何うも、その位の中が一番取扱が面倒なものですよ。何

んだか潰れやしないかと思ふやうでせう』

『本當ねえ、奥さん』

敏子は細君の方を見て言つた。

敏子の箸を取る間、細君は其子を婢に抱かせた。と、家の子供達は、赤坊をめづらしがつて、庭の方に抱いて行く婢の後を跟いて行つた。總領の女の兒は、「敏子さんの赤ちやん！まア可愛い」などと言つて、引込ませてゐる手などを弄つて見る。

一重ざくらはもう盛を過ぎて居た。彼岸に近い日は暖かで、芝草の若い緑は既に美しく萌え出して居た。萬雨の赤い實の鈴生に生つた鉢や萬年青の生々した鉢などが踏石の上においてあつた、藍の模様の鮮かに出てゐる手水鉢の水に日の影が綾をなして光つた。庭には小鳥が囀つて居た。



三十八

封筒に杉山常と書いてあつた。誰だか鳥渡思ひ出せなかつた。それが昨年まで沼のある故郷の町に居た小照で、今度漸く此地からでるといふ名でひろめをしたといふことが解つた時には、清は不思議な気がした。

四五日してから、清は橋があつたり運漕店があつたり間屋があつたりする下町の狭い賑かな通を歩いて行つた。其處には入口は狭いが大きな座敷のいくつもある土地で有名な料理屋があつた。女中は伴侶のないのを聞いて、氣をさ

かせて、奥深い世離れた六疊の一間に清を通した

『てる？聞いたやうで御座いますけれど……』女中は首を傾けて客の顔を見た。

『まだ、先月出たばかりだつて言ふんだからねえ』

『一つ聞いて見ませう』

かう言つて女中は二階を下りて行つた。

手紙の中にも『誰一人知る人もない土地とて、心細く暮し居候ま』と書いてあつた。容色だつて好いではなし、

年だつて若いのではなし、藝だつて出来るのではなし、かうした東京の場所に来ては、賣れるなどといふことは望まれないことであつた。清は東京の下町の何不足ない商賣の家に生れて、娘の時代を零落の運命に逢つた不仕合な女のことを考へながら、了然として獨り巻煙草をふかして居た。



てるは芝の家いに午後ひるごから出懸でけて行いつて留守留守であつた。しかし行いつた先まの近所きんじよに電話でんわがあるから、「大急おほいそぎで来るやうに言いつてやりました」と女中にようぢゆうは知らせて来た。「お名なざしのお客きやくさんなら、是非ぜひ待まちつて戴いたいて下さいな」と兼ねて懇意こんいな其その藝妓屋げいきやの姐ねえさんは電話口でんわぐちに出いて言いつた。電燈でんとうが點ついて段々だんだん日が暮くれて行く間まを清しみずは退屈たいくつして、欄干らんかんの處ところに立たつて四邊しへんを眺ながめたり、廊下らうかを彼方あつち此方こつちと往來わうらいしたりして居ゐた。瓦甃いれざうと物干臺ものひきたいとの上うへに廣ひろく見渡みわたされる夕照ゆきざうの空そらの色いろは、見みる間に段々だんだん薄うすくなつて、近ちかくを通とほる電車でんしゃの線せんの鳴なる音ねが唸うなるやうにをりをり聞きえて来た。すぐ下したには板塀いたべいで圍かこまれた町家まちやの裏うらの廣場ひろばが見みえた。風呂場風呂場は花崗石かこうせきが敷しき詰つめてあつた。越後訛えちごまじりの風呂番風呂番の男おとこが、熱あつい湯ゆを和やめたり背せ中なかを流ながして呉くれたりした。清しみずが

久ひさし振ふりで好いい心持こころもちになつて上あつて来た時ときには、膳でんがもうちやんと茶湯臺ちやうとうだいの上うへに出い来て居ゐた。やがて銚子ちやうしを持もつて入いつて来た女中にようぢゆうは、清しみずの手てにした盃さかづきに酌しやくをしながら、「もう、ちき参まゐりますよ」かう笑わひながら言いつた。小照こしょうがその顔かほを小屏風こびんぷうの蔭かげから見みせて挨拶あいさつしたのは、それからまだいくらかも経たたぬほどであつた。「服部はつべさん……私わたし、吃度きつど、さうだと思おもつた」かう言いつて、入いつて来て、女中にようぢゆうの傍はたに坐まつた。女中にようぢゆうは席せきを譲ゆづりながら、見みぬ振ふをして二人ふたりの様よう子すけを見た。藝者げしやも餘あまり好いい女おんなではなかつた。それにつくりも衣裳いさうも時ときの流行りうぎやうに後あとれて居ゐる。流行りうぎやうらない藝者げしやだといふことはすぐ



解つた。

二人の間が静くとも異様に女中の眼に映つた。關係があるやうにもあれば無いやうにもある。別れてからの挨拶などを聞くと、時々改まり過ぎたと思はれるやうな處がある。「知らせて上げて好いか悪いかと餘程考へたんですよ。でも、あの時あゝお約束をしたからと思つて……でも、本當によく来て下すつたのねえ。」かう言つて、「あの方はお變りなくつて……そら、あのお寺のお方？」

「ウム、達者で居るよ」

「此頃、彼方に入らつしやることがあつて？」

「昨年の秋、一月ばかり行つて居た」

「彼處に？」

「いや、寺にさ」

「其時、彼處に行らしつて？」

「行つたけれど、君は居ないし、病氣だつたから、酒も飲まずに、午飯を食つて歸つて来た」

「病氣ツて？何うなすツて？」

「少し脚氣で」

「さう、それはいけませんねえ」

かう言つて、客の出した盃に酌をする。客は、

「今日は随分待つた……」

「本當にねえ、私、これでも大急ぎで来たんですよ。……屹度、何方か向ふで御目にかゝつた人だと思ひましたから……本當に初めての土地で、知つてる方にかうして聘んで戴く位難有いことはありませんねえ」かう小照は女中に言つた。



女中が下に行つてから、

「何うだえ、流行るかねえ？」

客がかう訊くと、「實は今日もそれで相談に行つて居たのですかね」小照は客の方を見て、「何うも此の土地は方角が私の性に合はないんですって……。折角出たんだし、姐さんも今少し辛抱すればツて言つて呉れますから、せめて半年位居て見やうと思つたんですけれどね、長く居れば居るほど損になるばかりだつて、上手な易を見る人が言ふんですもの」

「ぢや、もう廢業るのかえ？」

「これは内所よ、……田舎に行つてもそんなことを言つては厭ですよ。……公園に出やうと思ふの」

「公園？……公園よりは此處の方が好いだらうがな」かう

言つた客は、場所に居られずにさうした所に住替をして行く流行らない藝者を氣の毒にもあはれにも思つた。

小説が好きで、「不如歸」や「己が罪」などの話をよくする女であつた。「私のことを書くと、それは可哀相な小説になりますよ。」こんなことを常に言つた。

田舎では掃溜の中に下りた鶴のやうに一時は騒がれたものであつたが、かうした東京の料理屋では、粧飾も態度も著しく見劣がされて見えた。

田舎に居る時分、商賣上競走する女があつて、一時非常に苦勞をしたことがあつた。神経過敏になつたのを、「氣が變だ」などと噂に立てられたこともあつた。「照ちやんのお座敷は氣が詰つて」などと茶屋の女中も言つた。しかし清は藝者の型にはまらないやうな眞面目な静かな處が好きだ



ツた。  
二人の間には不思議な友情といふやうなものが出来て居た。

「今になつて見ると矢張田舎に居た方が好かつたと思ひますよ」かう言つて小照は考へて、「彼方に居れば、扇屋の小照で済して居られたんですものねえ」

「それに誰かも居たしねえ」

客が兼ねて聞いて知つて居る相徳の旦那の話を匂はせて笑ふと、

「服部さん……もうあの事は言はないで下さいよ。若い盛りを田舎に埋れて了つて、そして今時分こんなによこまごして居るのも、皆なあの爲めですもの」

「其時分だつたね、君を口説いたことがあつたね」

客は少し酔つて來たので、こんなことを云つて笑つた。

「さうでしたね」

と小照も思ひ出して笑つて、「普通ならあの時ぎり御目に懸かれなかつたお客さんね、貴郎は。」かう言つて間を置いて、「だつて、あの頃は私、鬚の生えた人が大嫌ひだつたんですもの。それに私、かういふ商賣をして居ても、その時分は氣が小さくつて、そりや仕方がなかつたんですからねえ。鬚の生えた男を見ると、それこそ戦慄ひがする位でしたもの。……町の金比羅様に願をかけて、夜中にお参に行つて、金比羅藝者と言はれたのもあの頃でしたねえ。」

「考へると、滑稽さね。あの時分はあれで大真目だつたんだからねえ」

客が笑ふと、



「私も困りましたよ、本當に、あの時は」  
小照も笑つた。

「不思議なもんさね、縁といふものは」  
「本當ねえ」

かう小照は染々言つた。  
「けれども今や駄目だね、もうさういふ氣は起したく  
つたッて起らない」

わざとこんなことを清が言ふと、  
「随分御挨拶ね」

と小照は笑つて、「今度は私が振られる番？」

「困らせられる役は僕は御免だ。」  
客は盃を小照にさした。  
女はそれを干して、

「服部さん、貴郎も御惚けなさいよ。少しは種を持つてる  
でせう？」

「それはあるとも……」

「お聞かせなさいよ。一體、何處なの、貴方のは？」

「そんなことは何うでも好い」

「何うでも好くはないのよ、聞きたいのよ。」

「まア好いよ、そんなことは」と笑つて、「いづれ其中つれ  
て行つて、ぢかに會せてやる。」

「さう、乾度」

と小照は笑を含んだ顔で客の方を見る。  
女中が再び銚子を持つて入つて來た時には、客は酒に酔  
つた赤い顔をして、茶湯臺の傍に横になつて居た。藝者が  
頻りに熱心に何か話して居ると、客は面白さうにフムフム



言つて餘念なく聞いて居た。

『……照ッていふ字だけ、それでも感心に覺えて居たんですッて。それで先月出た藝者にさういふ名の女があるだらうッて、彼方此方大騒ぎをして探したんですッて。私、ある所に出たんですけれど、貰つて行つて見ると、禿頭が二人。私が入ると、『ヤ、小照』と言ふんでせう。一人は松原の金持のお爺さんで、一人は製粉會社の重役なのよ。それから、半玉を二人聘んで、カツボレを躍らしたり、何かして、それは大騒ぎよ。あんなお爺さんになつても、あゝいふことが面白いんだと思ふと、私、可笑くなつて了つた：……』

煙草を一服とんと叩いて、

『それでも難有いわねえ、忘れないで、さうしてまで聘ん

で下さるんだから』

小照はそれからそれへと話した。田舎に居る時分のことが一番多かつた。田舎の新聞に競争して居た女は悪く言われたが、自分だけは賞められて出たといふことや、料理屋のお袋さんに惜まれて、泣きの涙で別れて来たことや、此間も土地で評判の紳士にある料理屋で聘ばれて、いろいろ田舎の話をしたことや、話は中々盡きやうともしなかつた。後には段々身の上話にまでなつて行つた。

かれの悲しい閱歴は十四歳頃から始つて居た。十歳の時に父に死なれ、商賣上の必要から、好まぬながら母は後夫を持つことになつたが、その後夫が何うしても十分に信用が出来ないので、母は財産を皆な自分の名義にして、決してその自由には出来ぬやうにして置いた。継父と母と幼い



娘と、その感情の長い間の衝突は、母が死の病床に就くに至つて、破裂するといふやうな悲しい運命をかれは持つて居た。十四になつたばかりの娘は、死の床にある母を強ひて説いて、財産奪替の書類に調印させやうとする繼父の恐しい見幕を見た。また、母が一人娘の爲めに頑固に最後までそれを拒んだ時の凄しい表情をも見た。

「其時私の心に染込んだ人間の淺間しさといふことが何うしても抜けませんの……」

小照はかう昔を語つて聞かせた。

思ひのまゝにならぬライフはかうした女の社會にも随分多かつた。父の爲め母の爲め、家の爲め——かう思つて金比羅に御百度を踏んだり、豊川稻荷に斷物をしたりする群は尠くなかつた。ある女は弟が氣が狂つて病院に入つて居

るのを、毎月二度づゝ車に乗つて新宿の郊外まで見舞に行つた。ある女は力にした兄の肺病で死んだ電報を電燈の明るい賑かな座敷で受取つた。ある女の父親は朝から酒を飲んで管を巻くのを毎日の職業のやうにして居た。

「贅澤はさせなくつても、親に不自由だけはさせたくない。時には旨い酒も飲ませて遣り度い。一年に一二度は温泉にでもやつて保養をさせてやりたい」さうした望もかれ等には容易には達せられなかつた。

時々歸つて行く家は、大抵狭い通の細い巷路の中であつた。家と家との間に挟まつた室は暗く鬱陶しかつた。釜には風鈴が音を立て居たり籠で鈴虫が鳴いてゐたりした。土蔵の間から射込む夕日は暑かつた。

さうした家の一軒を清は知つて居た。それは氣の勝つた



母親と弱々しい人の好い父親とを持った女であつた。「私の十三の時よ、父さんと母さんと仲違ひをするのを見るのが厭で厭で、それからかういふものにならうッて言ふ氣を起したのよ」其女はかう清に話して聞かせた。

其家を出て、少し行つた處に橋があつた。其處から見ると、川には荷を積んだ船が幾艘となく往つたり來りして居て、汐時の黒い水はたふたふと黄い夕日の影を揺かして居た。夕暮の色彩の多い雲が町の通を派手に見せた。

角に醫師の家があつた。其前を此處等でなければ見られないやうな島田に結つた若い娘が通つて行つた。物を賣る店には、子供等が五六人も集まつて何かガヤガヤ言つて騒いで居た。近所の工場で時間の汽笛が鋭く鳴つた……ふと氣がつくと、小照は三味線の調子を合せて居た。

例の喧しい流行唄を少し弾いて居たが、客が横になつたまゝそれを聞かうともしないので、三味線を傍に置いて、小聲で獨り唄をうたつた。

「藝者なんて、駄目なもんだな。今少し暢氣な氣分になつてもよささうなもんだ。藝者になつた甲斐に、思ふ存分、男を玩弄にして見るといふ氣分にはなれないものかな」こんなこと言つて客は笑つて、「何もそんなにクヨクヨ思はないッて好いちやないか。一體、親だとか、家だとか、兄弟だとか、さういふことは考へないで、今少しはハキハキすることは出来ないものかね。」

「随分ですねえ、服部さんは……人がこんな眞面目な話をしてるのに……」

小照はかう言つて笑つた。



暫くして、二人は一緒に料理屋を出た。二人は並んで平  
氣で歩いて行つた。小照はキントンの鹽焼だのを入れた  
折を「これ、私、頂戴してよ」と言つて、ハンケチに包ん  
で持つて居た。月の明るい夜であつた。角に電車の停留場  
があつた。

二人はやがて別れた。

十分後には、清は電車の中で、さうした女のことを考へ  
たり、故郷の沼の畔の家を思つたりする人であつた。

三十九

氣の勝つた母親と人の好い父親とを持つた女は、いつも  
橋の傍から電車を下りて、細い巷路の奥にある深川の家  
に出懸けて行つた。

それは富岡前の自動電話で京都行の禮を清に言つた女で  
あつた。清がその女に再び逢つたのは、また風寒い二月の  
頃で、椎の葉を透して夕日のキラキラ川に映るのを見ると  
いふやうな一間であつた。をり／＼波を立て、小蒸汽の通  
つて行くのが、繪のやうに其處から見えた。



山崎の  
手紙  
の  
返事

旦那との手が切れて、再びさうした商賣をしなければならなくなつたその女は、軒燈の並んだ、細い通の、格子造の家の二階に朝夕を送ることとなつた。其二階は八疊で、欄干からは、廣い空を隔てて、場末でなければ見られないやうなトタン屋根の小さい工場の煙突だのが見えた。新しい胴かけを當てた三味線が壁に一挺かけてあつて、大きな鏡臺には、時々丸顔の頼の廣い女の顔が映つた。清元や常盤津を淡ふ三味線の音が其處にも此處にも聞えて、夕方になると、突當りの湯屋から白粉を眞白につけて毛すちを長く挿したまゝの女が、だらしない風をして、そろそろと出て来る。やがて角の玉突場に明るい電燈がつくと、あたりの料理店や待合に出かけて行く女を載せた車がその細い通を幾臺も通つて行つた。

其女の居る家には、他に藝者といふものはなかつた。姐さんも居なかつた。主人といふのは年を取つた爺さんで、親類の婆さんが、煮沸や洗濯の世話に来て居た。晝間は爺さんは植木鉢などを弄つて日を暮した。清は自から自己の心の状態を翻つて見ることが度々あつた。「何うなつて行く心か解らない」いつもかう思つて、自己の心のかうした徑路を取つて来たことを考へて見た。「これから何うなつて行くんだらう？」かうも考へて見た。かれ自身に取つても、實に驚かるゝ變遷であつた。そして其變遷が極端から極端へと走つて居るやうに見えながら、しかも其の徑路が自づからたどられるやうになつてゐるのが不思議であつた。



「敏子さんが来てから、貴方は丸で變つてお了ひなすつた」

何ぞと言ふと、いつも細君はかう言ふのが例である。

「あの人が来てから、家庭が丸で前の家庭とは違つて了つた。それを考へると、私ばかりして居られないやうな氣になりますよ」こんなことも言つた。

「だつて、仕方がないさ」

いつも清はかう言つて笑つた。決して細君の言葉を否定しなかつた。しかしこの變遷は果して敏子の爲めだらうか。かれはかう一步を進めて考へて見ることもある。寧ろ——寧ろそれよりも、さうした變遷の時に際して、丁度敏子が来たといふ方が正しいやうに思はれた。

其女は何處か敏子に似たところがあつた。眼と眼の間が

矢張違かつた。

昨年清が九州に行つた時、その旅鞆の中に、敏子の其頃の寫眞が一枚入れられてあつた。廂髪に袴、風呂敷を横に抱えて、スツキリとした風を見せて立つて居た。

何うした機會が、京都の旅舎で、其の寫眞を女が手に取つて見て居たことがあつた。四邊には鞆の中から取出した種々なものが散ばつて居て、簾を透して、暑い鮮かな朝日が晴れやかにさし込んで居た。

「何方の寫眞？」

じつと見て居た女は、やがて清の方を見て訊いた。

清は黙つて、手を延して、それを取らうとすると、女は「まア、見せたつて好いちやありませんか」向ふむきにな



つて、今一度見て、『奥さんのお若い時？……さうぢやないわねえ。奥さんぢやないわねえ、誰でせう？』

考へる真似をして、  
『本當に何方？』

『まア、好いから……』

『教へて下すつたつて好いちやありませんか。』かう言つたが急に、『解つた、解つた』と手を打つて、『女のお弟子さん？』

『まア、好いよ』

『さうよ、さうよ、それに違ひない』體を自烈度さうに動がして、向ふに居る年増の女の方に向いて、『お上さん、御覽なさいよ。ほら、これが先生のお弟子さん』

言ひ懸けた處を、清は手を延して、それを引たくつて了

つた。

『随分よ』女は清の方を見て、『そんなものを持つて歩いて先生も随分甘い方ね……およしなさいよ。見つともないぢやありませんか』

『大きなお世話だよ……』

清はかう言つて、笑ひながら、それを書籍の中に挟んで了つた。

フラスシテンのその手靴は、途中で雨に濡れたり汗にぬれたりして、歸る頃には、その寫真にもところどころ黄い黒い斑點が出来て居た。

深川の女の寫真も一二枚は貰つて、清は持つて居た。それは敏子が身を隠す前後であつた。ある日、敏子は清の留守にその書齋に入つて行つた。何氣なく見ると、其處



にカビネ形の女の寫眞が一枚放り出されてあつた。

其女が普通の女でないといふことはそのつくりやら態度やらですぐ解つた。

髪を銀杏返しにして、少し低頭き加減に横向の顔を見せて、手に持った花を見詰めるといふ姿勢をして居た。

敏子は不思議な氣をせずには居られなかつた。今までこの書齋にかうした寫眞などはついぞ見た例がなかつた。

敏子はじつとそれに見入つた。

其處に入つて來た細君は、

「そんな寫眞を内に呉れた女があるんですッて……」かう言つて笑つて「何うしても、素人とは違ひますねえ」

眼と眼の間の遠い表情のある敏子は、矢張眼と眼の間の遠い表情のある女の寫眞にじつと見入つた。そしてそれを

静かに机の上に置いた。



四十

水が灰色に見える曇つた日もあつた。帆が風を孕んで幾箇となく上流に流れて行く晴れた日もあつた。水に落ちる河沿ひの家々の灯影の美しい夜もあつた。

橋の袂からは、烟突のある大きな赤煉瓦の建物が正面に見えて、長い橋を渡つて行く車や馬車や人の足音が遠雷のやうに轟き渡つて聞えた。大河を往來する小蒸汽は、集る客を載せては、鼠色の烟を立て、其の橋の袂の發着所から出て行つた。

汐の満ちたたふたぶする鐵納戸色をした水は、始めは岸

に並んだ二階家の欄干だの、白壁の土蔵だの、瓦屋根の上の物干臺だの、大きな字を書いた穀物問屋の倉庫だのを映して居たが、それが段々騒がしい町の雑鬧から離れて行つて、やがてはトタン屋根や、煙筒や、岸に添つた路や、船宿の裏窓などを映すやうになつた。

此方の岸から彼方の岸に漕いで行く渡船には、派手な編蝠傘を日にかゝやかせて居る若い女もあつた。

白いペンキ塗の腹を見せて勇しく水を切つて行く短艇もあつた。

小蒸汽の中は夕日に明るかつた。其處にはいろいろな人が、或は相並んで、或は背を合せて腰をかけて居た。工女らしいものもあれば場末の商人の細君らしいものもある。腹がけをした職人もあれば島田に結つた娘もある。其處に



長城

3.

3.4

3.3.0

大きな鞆を持って乗込んが男が、俄かに立上つて、「今度皆さんに御披露いたすものは——」と言つて、廉い繪葉書の説明を早口で饒舌り出した。其男の横顔から手にひろげた繪葉書に夕日が赤くさした。

塔や瓦葺や煙突や、それが暗れた明るい空にクツキリと浮出すやうに見える。

長い土手の方に小蒸汽が沿つて行くにつれて、後にして来た都の雑閘が一層明かに其の餘響を傳へて来るやうにも思はれた。

ある發着所からは土手に上る路が斜について居て、名物の圓子を賣る大きな家の二階の欄干には、女客が二三人此方を見て居た。

小蒸汽は其處からまた左の岸に近く浜つて行つた。川は

都會を離れて段々趣が變つて行つた。岸には蘆荻や間や蘆などの縁も見えた。

富んだ人々の別荘が今度は岸から岸へと續いた。大きな立派な二階があつたり、しやれたつくりの離屋があつたり、川に臨んだ小さな亭があつたりした。充分に手の入つた裁込は何處の家も綺麗で、低い扇骨木の垣は見事に刈込まれてあつた。初夏の縁の中に蓄薇の紅いのが特に際立つて鮮かに見えた。石垣の下には何の家にも船が一隻づつ繋がれてあつた。

此方の發着所から次の發着所が小さく見えた。その棧橋から、路は田があつたり葎の生えた川があつたりする郊外へと通じて居た。

川に臨んで一軒瀟洒な水樓があつた。其一間から三味線



の音が聞えた。  
清の姿はをりをり其處に見えた。

四十一

馬橋は時々郊外の清の家を訪ねて来た。  
「何うも家庭といふものは難かしい面倒なものですな」  
こんなことをよく言つた。  
子が生れてから一月と経たない中に、若い人達はもう喧嘩をした。馬橋も敏子も成だけその内輪を知らさぬやうにして居るけれど、それでも何處からとなくさうした話がちよいちよい耳に入つた。「これは私の子ですから私の自由になります。殺すなり何うするなり私の勝手です」其家の前を



通つた或人が、かう敏子の肝癢を立てゝ居たのを聞いて来て清に話した。

馬橋が来る度に、

「何うだね、此頃は少しは家庭が緒に就いたかね」

かう清が訊くと、

「まア、何うやら彼うやら遣つて居ます」

いつも馬橋はかう答へた。

月の明るい夜などそれでも二人して子をつれて遣つて來ることもあつた。清が夜遅く停車場からの暗い道を歸つて來ると、向ふから來て摩達はうとした二人連が突然、

「先生」

と聲を懸けて、

「今まで御邪魔して居ましたのよ、……」間に顔を白く見せ

た敏子は清の顔を覗くやうにして、「先生、酔つて入らしてね」

「どうだ、今一度行かないか」

「もう遅いですから」

かう言つて、蛙の鳴く野道を二人は睡じさうに行き過ぎた。その後姿を清は闇に見送つた。

ある時、馬橋は、

「何うも山田君と一緒に居ると、好いこともあるが、面白くないこともありまますから、今少し狭くつても、家賃の廉い家に引越して別にならうと思ふんですが——」

「何うも面白くないかね？」

「いろんなことがあるんです……」

かう言つて馬橋は笑つた。



「でも、山田君には、君達は随分世話になつたぢやないか」  
「さう思つて、大抵なことは我慢して居たんですけれども：  
……喧嘩ッて言ふほどのこともないんですけれども、此頃少し感情の面白くないことがあるんです。」

「何うしたんだ？」

「何あに、詰らんことです……」

清は笑ひながら、

「矢張、夫婦者の處に獨身者が一人居ては何かにつけて具合が悪いらう？」

「さうかも知れません」

馬橋は苦笑した。

暫くしてから、清は、

「世話になる時はなつても、その事件が一段落がつくと、

世話する方でも今までの熱心の度が薄くなるし、此方でも  
まア不用といふやうな形になるからねえ。何うも一緒に居  
ては、さういふことが起り易いねえ」

「何うも困るんです」

馬橋はかう言つて、少し躊躇して、「何うも面倒臭くつて  
困るんです。私が社に行つてる間、可怪しなことがあるん  
ですから困つて了ふんです」

「可怪しいッて、何んなこと？」

「詰らんことですが……私の留守の間は、一緒に午飯を食  
ふにも、何か言ひ出されやしないかと具合が悪くつて仕方  
がないッて言ふもんですから」

「何かそんなことがあつたのかえ」

「別に口に出して言つたといふ譯でもないんですけれど：



清は山田と敏子との間を考へぬ譯には行かなかつた。

やがて馬橋は山田と別れて移轉した。

「これから新しいライフに入るつもりです」

其の移轉を知らせに来た時、馬橋はかう眞面目に言つた。

元氣な顔色をして居る時もあれば、非常に沈鬱に陥つて

居る時もあつた。その時々々の状態に由つて、清は若い人達

の動搖の多い細かい心理を察することが出来た。

若い人達に取つては、新しいライフは決して楽しい生活

ではなかつた。

「先生などでも矢張ライフが辛いことがありますか」

ある日、馬橋はかう清に言つた。

「それはあるともねえ……」

「何うも私などには刺戟が多過ぎて困るんです……」清の

方を見て、「今少しかう落附いて居たい、暢氣にして居たい

と思ひますが、何うもそれが出来ない」

「しかし、さういふ處は誰でも通つて来るんだから。」

「何うもいけません。今少し動搖しないやうになると好い

ですけれど」かう言つて、「先生なども矢張さうでしたかし

ら」

「それはさうとも……、或は君などよりもつと烈しかつた

かも知れない。今と違つて、時代がもつと非常に壓制的だ

つたからねえ」

「それはさうでしたらうな……」少し考へて、「然し、今の

若い者はさういふ壓制的なものが上にないだけに、猶辛い



でせうな、自覚してただけ猶辛い、何でも勝手なことが出来るだけに、その報酬とか責任とか言ふものはすべて受けなければなりませんから」

「それは仕方がないねえ」

清はかう笑つて言つたが、「それにしても僕等の若い時代は君方の時代とはもう餘程の差違があるねえ。時々君方の話を聞いたり、することを見て居たりしても、僕等にはもう鳥渡呑込めない處がある。たとへばラブをするにしても決して君達の遣つたやうなラブはしなかつた。」

「さうですか。……何んな處が違ふんですか」

「それは鳥渡説明しにくいけれど、……感情一方で、消極的で、好く言へば忍耐悪く言へば今の青年よりぐづぐづしたやうなところがあつた……。その代り感情の綺麗な長所は

あつたがねえ」

「さう」と馬橋は考へるやうな眼色をして、「さういふ處がありますね、島崎さんの『春』を読んでも。さういふ處が見えますからねえ……」急に、「私達若い者の生活を先生にお目にかけていたやうな氣がする」

「しかし、それはさうなくちやならん譯だ。時代が違ふんだからねえ」

馬橋も段々調子に乗つて来た。「我々の生活はそれや御目にかけていたやうです。それは随分思切つた、セツパ詰つた生活を送つて居ますからな……此間なども酔拂つて喜劇を遣りましたよ」

「何う？」

「夕方社に三四人友達遊びに来て、これから酒を飲に行



かうツて言ふんです。好からうツて言ふので、銀座の正宗ホール——御存じでせう、獨歩が『號外』に書いたところ、あそこに行つたんです。何でも一時間、二時間位居ましたから餘程飲んだんでせう。ひどく酔つてすつかり感激して了つて、盃を合せたり、一緒に抱き着いたり、泣いたり嘆いたりするツていふ騒ぎなんです』

『それは随分騒ぎでしたよ。』と馬橋は其時を思ひ出して笑つて、『それから何處かに行かうツて皆で言ひ出して、へいれけに酔つて居ながら銀座の通に出たんです。處が其中の一人が夫婦づれに戯談を言つたとか何うとかで、何かぐづぐづ言ひ合つて居ましたが、段々周圍に人立ちがして、跡では何でも巡查が来たやうでした。私なども酔つて居ましたけれど、無理に其男を引張つて、それでも何うやら彼うや

ら尾張町の角に来て、電車に乗つたんです。處が乗客の邪魔になるなんて言ふことは眼中にない。『貴様は可愛い奴だ』とか『貴様とこれから兄弟にならう』とか何とか言つて、無闇に抱きついて感激するつて言ふ始末なんです。あの時は僕も酔つて居ましたけれど、弱りましたよ、歌よみの園田が、接吻するんだつて、僕に矢鱈に鬨の生えた頬を押附けるんですからな』

『それは滑稽だつた』清には若い人達の荒んだ心持が分ると判るやうな気がした。

『皆な困つて居るんでせうな』

暫くして清はかう訊いた。

『相應に働いては居るんですけれど、……皆な貧乏してま



「耽溺するからでせう？」

「随分盛に遣つてるやうです」かう言つて笑つて、「餘り刺戟が強いもんだから、更に強い刺戟を女や酒に求めるつて言ふことになるんでせうねえ……病氣を遣らない奴は一人だつて無いでせう」

「フム」

清は頭を振つた。

「それでも眞面目に物を考へる時もあるんだらうねえ」

「それはあるんでせう……あり過ぎるんでせう。それで却つてさういふことになるんだらうと思ふんですがね」

「つまり、眞面目なんて言ふことがもう何んだか甘過ぎるつていふ風に思はれて來たんだね」

「さういふ處もあるやうです。それに孤獨の寂しさといふ

風な處が、若い者にいろいろな業をさせるやうですな」

「フム」

清はまた頭を振つたが、「しかし何うも、私などの今の考から言ふと、消極的に過ぎるやうな氣がする。デカダンといふ思想にも、いろいろな形式があつて、其人々に由つて其の『あらはれ』が違ふだらうけれど、今少し積極的のデカダンの方式を取つて行けないだらうか。さういへば私達の若い頃のセイチメンタリズム、あれも一方から言ふと、デカダンと言つたやうな處がないでもないからねえ。肉體の損傷と神経の疲勞と感情の誇張と……」

「さうですな……しかし底を破つたやうな處があるにはありませんね、今の若い者の思想には——」

「其處が私達のやつたセンチメンタリズムと違ふ所かも知



れない』

其日は何うした機会か、さうした話がそれからそれへと續いた。六月の暑い日がキラキラして、縁にかけた青藤に梧桐の縁が揺れた。二人はビールを飲みながら話した。

『何うも私の性質には矛盾した處があつて誤解されて困ります。』かう言つた馬橋は清の方を見て、『何處かかうわざと反抗するやうな處があるつて、よく友達からも言はれるんですが、そんな處があるでせうか』

『さうさね……さう言つたところが少しはあるね』

『何うも困るんです……自分ではそんな氣はないんですけど』

『遠慮なく僕に言はせると、君は鳥渡何處かすます癖がある。今、流行つてる言葉で言ふと、底が抜けて居ない。す』

つかり自己の真相を人の前に顯はすと言ふやうな處がない。』少し考へて、『しかし自己の真相を其儘に顯はすといふことは餘程難かしいことだがね』

『さうですか』とかう物を深く考へるやうな眼色をして、『矢張、幼稚い頃からの境遇で、知らず知らずの中にさうなつたんですな』

『境遇ツて言へば、今一つかういふ處がある。矢張宗教界で育つた人だといふやうな處がある。君は自分では宗教を捨てたと言つてるけれど、まだ餘程理想的な處がある』

『何ういふ風にでせう？』

『さう聞かれると困るがね……行ふといふ氣分よりも欲するといふ念の方が盛んのやうだ。行ふといふ方面では非常に消極的な傾向があると思ふね』



橋本清  
解

「何ういふことですか、一寸よく解りませぬけれど」と馬橋は眼を瞬いて、「何うも一體エゴイスキックで困るんです。總ていろいろな誤解が其處から來ると思ふんです」俄かに感激したやうに頭を振つて、「何うも弱者で困るんです。色々なことを考へるだけ、それだけ弱者だといつも思ふんですけど……これでも年を取れば何うかなるでせうか」

清はそれには答へずに、  
「僕の今までの経験によると、自脈を取つていろく〜に懊惱煩悶する人と、自分のことは丸で放つて置いて、外部で生活して行く人と二通あるやうだね。自脈を取る人に限つて、實行と内部精神と丸で違つた方向を取るのを僕はよく見る。」

「私などは自脈を取つてばかり居て仕方がない方ですな」

馬橋はわざとらしく笑つた。  
話は絶えたり續いたりした。時々清はビールを馬橋のツブに注いでやつた。

「少し眞面目に遣らなけりや仕方がないですな」  
突然馬橋はかう獨りで言つて、ビールをグツと飲み干した。

また時には、祈禱をする時のやうに、顔を上に眼を細く深く物を思ふといふ風をして、  
「何うも満足が出来ない……矢張底は懷疑に落ちて了ひますな……」少し考へて、「何うも矢張自脈を取つても何でも自分が出て、網を編んで行くより他に仕方がないと思ふと、つくづく厭になつて了ひますな」  
家庭に關しては、



「此頃ではもうつく／＼家庭といふことに愛憎が盡きま  
した。平凡なことですけれども、ラブと結婚といふ段も解つ  
て来ました」

理に落ちて話がなくなつて了つても、馬橋はぐづぐづし  
て居た。ビールを飲むでもなく、話をするでもなく、縁側  
に置いてある藤椅子に腰をかけたなり、床の間に近い柱に凭  
りかかつて見たり、身の置き場に困るといふやうな風をし  
て長く清と相對して居た。そして時々思ひ附いたやうに人  
生上の議論やら思想上の疑惑やらを持出した。

四十二

馬橋の移轉した家は、四谷から市谷に行かうとする坂の  
下にあつた。三間位の窓の低い家が細い通に面して幾軒も  
續いて居る。腰辨や會社員や電話交換局に勤める女などが、  
毎日朝早く其處から出懸けて行つた。

其家からは子の啼く聲が常に聞えた。  
「本當にまア、何うしたつて言ふんでせう。あんなに啼か  
せて？」近所ではかう言つてよく其噂をした。役所に勤め  
る人の家の品の好いお婆さんは、「でもねえ、母さんがあんな



なにお若いんだから、お氣の毒のやうでもありませんよ。かう隣とりのの會社員くわいしやんの細君ほそくんに話した。

婢めいを慶庵けいあんから頼たのんで置いて見たが、腰こしを落おつて居るやうなものもなかつた。それに經濟けいぎの方かたにも餘裕よゆうがないので、家事かじは總すべて敏子としこ一人ひとりでしなければならなかつた。飯いひの炊たき方かたや勝手かて元もとは、それでも段々だんだん覺おぼえて來きたが、襪わ襪わの洗濯せんたくから家の掃除そうじ、跡仕舞あとしまひ——片時かたときも手てから離はなれない子の世話せわが中なかでも一番骨いほが折やれた。時ときには勇氣ゆうきを起たして、結付むすに負まつて、洗濯せんたくなどを遣やつて見ることもあるが、お嬢おぢやうさん育そだちの弱よわい體からだには、僅わずかかの間あひだでも紐ひもが肩かたに減入へいり込みさうになつた。

「少し見みて下くださいな、餘あまり泣なくから」

かう突つつて頼たのんで見みても、馬橋まはしは長ながくそれを抱だいて居ゐ

なかつた。

「子供こどもは啼なくのを氣きにして居ゐたら仕方しかたがない。啼なかせて置く方かたが運動うんどうになつて好いいッて言いふぢやないか」

かう馬橋まはしは平氣へいきで言いつた。

昔むかしのやうに机つくえに向むかつて書ほんを讀よむ暇ひまなどもなかつた。筆ふでなどはもう何日なんじつにも持もつたことはない。世話せわ女房にやうぼう——女おんなはさうした運命うんめいだとはかねて聞きいても居ゐり覺悟かくごもして居ゐたが、しかし過ぎ去さつた昔むかしが考かんがへられずには居ゐられなかつた。再またび繼つぎ合あせることも出で來きないほどに粉微塵こなみじんに碎くだけて行いつた二三年前にせんにせんにの夢ゆめの跡あとも悲かなしかつた。

「奥おくさん、……女おんなッて言いふものは皆みななかうしたものでせう

ね」

思おもひあぐんだといふ調子ていしで、かう清しみずの細君ほそくんに言いふことな



どもあつた。

郊外の清の家には、この頃女の弟子が田舎から一人来て居た。敏子も兼ねて其名を雑誌などで見て知つて居た。「非常に旨い處がある。田舎に居て、あれだけ書けるのは珍しい」かう清が褒めて居たのを聞いたこともあつた。

名はお國さんと言つた。

「今度来たお國さんは、しつかりした處があるツて、宅でも感心して居ますよ。何うか旨く行くやうにしたいツて言つて居ますよ」

細君は其の人のことをかう話して聞かせた。黙つて居る方だが物のよく解る性質のいい人だなどとも言つた。

敏子はそれを黙つて聞いて居た。

毎日、新聞社に通つて行く馬橋の姿もこの頃では何だか

頼み甲斐がないやうに見えて来た。それに、集つて来る友達達の無遠慮な話、卑しい女の心理を材料にして一般の女にまで當て箝めたやうな話——さうした話を得意さうに面白さうに話して居る男が淺聞しかつた。



お國さんがある日その坂の下の家を訪ねて行つた。  
敏子の眼には、肥つた、中背の、まだ田舎言葉の取れな  
い二十一二の女が映つた。馬橋の出動した跡を、獨り茶の  
間で添乳をして居ると、表に案内を乞ふ人があつて、顔を  
出して見ると、まだ逢つたことはないが、其人だとすぐに  
知れた。

『まア、好く……』

かう言つて迎へた敏子の顔は赤かつた。

縁側にはまだ洗はない襦袢が山をなして置いてあつた。  
座敷には玩具やら子供の衣類やら新聞雑誌やらが一面に散  
ばつて居た。勝手元もまだ片づけてなかつた。

『まだ、こんなに散したまゝで、掃除もしないんですから  
……坐るところもないやうですけれど……』

兎に角敏子は座蒲團を勧めた。

兼ねて聞いて居た其人とは思へぬほど違つて居る敏子を  
お國さんも見た。

髪は亂れて居た。顔は蒼白く、笑を含んだうらにも、何  
處か神経性の苛々するやうなところがあつた。寝かゝつて  
居た子が客が来たので眼を大きく開いて了つたので、敏子  
はそれを抱き起して、一度かき合せた胸の乳房を含ませな  
がら話した。始めて逢つた人のやうな氣は二人ともしなか



つた。

『また、可愛い、もう笑ひますのね』  
かう言つて、お國さんはあやした。

『本當に仕方がないんですよ。鳥渡も手を離れないんですからねえ』客の方を見て、『子供ッて言ふものは、それは世話なものね……かうして居るばかりで、一日何にも出来やしませんのよ』

『でも可愛いでせう』

『可愛いにはそれは可愛いけれど、それよりも手がかゝる方が大變ですから……』

『それはさうでせうね』

思つたより打解けた客の風に、敏子は段々気が置けなくなつて來た。文學の話も出れば、近頃ある雑誌に出たお國

さんの小説の話も出た。國に居て投書して居た頃の物語は二人を笑はせた。

『私などもう駄目よ』

敏子は暫くしてかう言つた。

『そんなことがあるもんですか。何かお書きになつて居るんでせう？』

『本當に駄目よ。子供があつては筆など執つてゐる暇はないんですもの……それでも、困つて來るものだから、お伽話などを書きますけれどね、本當に駄目なのよ。私など一體小説は書けない方の質かも知れません』

『そんなことはありませんよ』

『でも、よく言はれるんですもの』  
かうは言ふものゝ、敏子は藝術を捨てる氣はなかつた。



女の好奇心から藝術などを志して失敗したと言はれるのが  
いかにも辛かった。それに、自分より後に出て来たお國さ  
んの小説が、ズンズン世に紹介されて行くのも妬ましかつ  
た。

「實際の人になつては本當に駄目よ」

敏子はこのことをわざと言つて笑つて、「私、それや何  
んなに先生から傍に離れなくつちやいけないッて言はれた  
か知れなかつたんですけど……矢張さうした心地には却々  
なれないもんですねえ。女には出来ないことかも知れない  
わ」

お國さんは點頭いて見せた。

話に聞いて居ては解らなかつたことがすつかり解つたや  
うな気がしてお國さんは歸つて来た。別れる時、「本當にこ

れから一生懸命に勉強しませうねえ。一緒にね、本當にね、  
一緒にしませうね」かう言つて堅く手を握つた敏子の眼に  
は涙が閃いて居た。綺麗な感情と暖かい心とはお國さんの  
胸を動かさずには置かなかつた。お國さんは別れて来た人  
のことを考へながら、あふちの花の白く咲いた坂を町の通  
の方へと出て行つた。

五、十二、  
北条利平



四十四

長(あつ)新(しん)

「二度入らしつて下さい」

馬橋は幾度もかう清に言つた。

しかし清は行く氣にはなれなかつた。放つて置く方が好いと思つた。「自分達で蒔いた種は自分達で刈るが好い」かうも思つた。生中にその生活に觸れて行くのは却つて若い人達の平和を破る基にならぬとも限らぬやうな處もあつた。結んで解けない紛糾をも、時の力は段々に解いて行つた。清はじつとそれを見て居る人であつた。

「今日は大變な處に行きましてね」

ある日、細君は社から歸つて來た清にかう話しかけた。

「運悪く二人で物言ひをして居る處に邂逅しましてね、今日

日は、本當に今日位困つたことはない」かう言つて細君は

笑つて、「敏子さんも、あゝなると、随分負けない氣ですか

らねえ」

「一體、何うしたんだ？」

「私が行つて見ると、何うも變なのよ。……馬橋さんは奥

に蒲團を被つて寝てるし、敏子さんは、蒼い顔をして荷々

してゐるんでせう。それに、茶の間には徳利だのお膳だの

が一杯に散ばつて居るんですの……。變だと思つたけれど、

私、「何うしたの？」ツて聞くと、奥さん、何方が無理か聞

いて下さいつて、かうなんでせう。敏子さん、平生はやさ



しい聲をして居るけれど、あゝなると、それは随分大變ですからねえ。何處が私が悪いの？そんなこと言つたッて、酒を飲んで酔拂つて、悪友と一緒になつて遊んで歩くのが貴方の能ですかッて、かうなんでもすもの」

「神経が強い方だからな」

「本當ですよ。何うかしてやしないかと思ふ位でした。かう眼が吊り上つて居るんですもの」

「そして馬橋は何うして居た？」

「私が行つたもんだから、起きて來ましたがねえ。矢張り顔をして居ました。それでも怒つても居られないものだから、「大變な處を奥さんに見せた」なんて言つて笑つて居ましたがねえ、敏子さんの方は、中々さうさせて置かないッて言ふ風なんですの。何うかして、馬橋さんが一晩敏さ

や

んは理想家だから駄目だつて言ふと、生意氣を仰有い、先生の口真似なんかをして、貴方こそ若い年をして、勉強もしないで、酒ばかり飲んで、テカダンの真似なんか大さうひですッて、かうなんでせう。あれぢや、馬橋さんも駄つては居られませんからねえ」

「困つたもんだな」

「本當にねえ——あれほど大騒ぎをして一緒になつて……」  
 間を置いて、「で、仕方がないから、私は中に入つて、いろいろなだめて……成るだけ馬橋さんに口をさかさせないやうにして、何うやら彼うやら笑つて話をするやうにして來ましたかね……よくあゝいふことをすると見えるんですよ少し考へて、「馬橋さん、泊つて來ることなんぞあるんだと見えますねえ」



「それはあるかも知れん。新聞に居る人はその位のことは仕方がない」

「でもねえ、敏子さんにはそれが口惜しいんでせう。これほど盡して居るのに……といふ腹がありますからねえ」

「それはさうだらう……」

「それから貴方にも来て見て呉れッて、敏子さんが言つて居ましたよ。先生に一度来て見て貰ひたい。馬橋の遣つてゐる生活は好い生活か悪い生活か見て貰ひ度いッて言つて居ましたよ」

敏子は何ぞと言ふと、「では先生の處に行つて、何方が悪いか訊いて見ませう」かう口癖のやうに言つた。馬橋にはそれが不愉快であつた。馬橋に取つては、清や清の細君は

遂に親しみ難い人であつた。

「勝手に一人で行つて饒舌つて来るのが好いさ。僕が一緒に行く必要なんかあるもんか。」馬橋は面白くないので、つい友達の間に行つて酒を飲んだり夜を更したりした。

夜遅く歸つて来ると、敏子は長い手紙を書いて居ることなどもあつた。「何處に遣るんだ？」何處に遣つたつて好いちやありませんか」こんなことを二人は常に言ひ合つた。

故郷の母の許にやる手紙を敏子は此頃よく書いた。

ある日、馬橋が歸つて来ると、戸緊りが堅くしてあつて、鍵は隣の細君に預けてあつた。

國の母親が上京したので、小石川に出かけて行くといふことが、敏子の置手紙に書いてあつた。

敏子は流石に子を伴つて小石川に行く氣にはなれなかつ



た。しかし馬橋の歸つて来るのを待つても居られなかつた。敏子はお三輪の許に出懸けて行つて、途中で買つて来た牛乳一合とミルクの罐とを添へて、「成だけ早く歸つて来ますから、それぢや何うかお頼みます」と幼児を頼んで行つた。

掻き上げても掻き上げても髪は亂れ勝であつた。敏子は張り氣味の乳房を氣にしながら、電車の終點から程もない路を、急いでその兄の家へと行つた。

玄關の戸を静かに明けて、音のしないやうに茶の間に入つて行くと、其處には國から一緒に伴れて来た婢が居て、「まアお嬢さん」と聲を立てた。

母親は二階で嫂と話して居た。婢が知らせに行かうとする

るのを手で制して、敏子は苦しさうに先づ呼吸を吐いた。

母親のなつかしい聲がをりをり二階から洩れて来た。

それを敏子は暫し黙つて聞いて居た。胸の躍るのが他所目にもそれと見えた。

肥つた、莞爾した、眼に一種言はれないやさし味のある五十位の母親と、色の蒼白い神経性の亂れた扮装をした娘とはやがて相對して坐つた。いつもなら「母さん！」と懐かしさうに聲をかけずには居られないのだが、今日はさうした氣分にもなれなかつた。敏子は唯低頭さ膝に黙つて坐つて居た。

髪の薄くなつたのが一番先に母親の眼についた。

「體は此頃は好いのかえ？」  
暫くしてかう母親が訊いた。



「え、」

敏子は唯點頭いて見せた。

眼には涙が見えた。

庭の松では蟬が鳴いて居た。

「置いて入らつしたの？」

傍からかう嫂が訊くと、

「え、」

と矢張點頭いて見せた。

「連れて居らつしやれや好いのに、お困りでせう、乳が張つて？」

「い、え、」

嫂はやがて下りて行つた。暫くして上つて来た時には、敏子は眞赤に眼を泣腫して居た。

馬橋に取つては、敏子の母親が東京に来て居りながら、其身が普通の女婿の取扱ひを受けることが出来ないのが不愉快であつた。それは望まれないことだとは初めから知つて居る。さうされては困るから、敏子の籍を清の家に移したのだといふことも知つて居る。しかし今になつては、自分等二人の事件に傍から好奇に入つて来た清夫妻の心持が異様にも不思議にも思はれて来た。

「勝手にしろ」

思ひ詰めた揚句、自分からかう投げ出して了ふこともあつた。

「もう、十分に精まで嘗めて了つたんだ。今になつて何うしやうが、そんなことは構ふことはない」



かう自暴自棄に思ふこともあつた。其頃、國の方から戸籍に就いての話が出来かゝつて来て居た。金の五六圓も出せば、裁判所の手續もすまずことが出来た。馬橋はいつそ結婚届を出して了はうかとも思つた。さうしたら新しい意味が出て来るかも知れぬとも思つた。しかしもう二人ともさうした氣分にはなれなかつた。「しかしこれの籍だけは貴方の方に入れて下さい。私の方には持つて行くところがないんですから」

子に就いては、敏子はいつてもかう言つた。母親の滞在は二月以上に亘つた。敏子は眼を見てはよく出懸けた。後には子を抱いて戸緊をして行くことなどもあつた。

馬橋はいつも夜遅く酔つて歸つて来た。

新聞社の前借が段々溜つて行つて、其月の俸給は米の代にすら足らなくなつて居た。机の上の硯は塵に埋れて、原稿紙は其處にひろげたまゝになつて居た。

清も敏子の母親には三度送つた。初めは清が小石川の家に出懸けて行つた。其時母親は、いろいろ禮を述べた末に、「何うも我儘で仕方が御座いませぬ。まア、何うか今度は御迷惑をかけないやうにと呉々も申しつけて置きましたけれど……旨く参りますことやら、何うやら、危ないもので御座います」かう言つて笑つた。

敏子と馬橋との此頃の心持も其内段々清にも知れて来た。二度目には、母親が清の家に訪ねて行つた。其時は敏子も一緒に子を抱いて来た。

清が母親に、



「何だか、馬橋君、此頃非常に煩悶して居るやうですが、母さんが入つしやつたといふことが何か關係してゐるんじゃないでせうか」

かう言ふと、母親はしつかりした調子で、

「いゝえそんなことは御座いませぬ……私がこれを何うかしやうなどと思つてゐるやうにお考へかもしませんが、私はそんなことは決して致しませんですから、……私の方では、何うかさういふお世話を二度とおかけ申したくないと、かう思つて呉々もこれに申して居るやうな譯ですから」調子を和げて「處が、何うもあの男が邪推深いさうで……いろ／＼なことを申すさうで御座いますけれど、此方をさしおいて、そんなことは決して申しませんですから」鳥渡笑ひかけて、「どうも此頃では、不真面目で困るんださうです。」

「何うも長く續けば好う御座んすけれど」

かう言つて清の方を見た。

「矢張お父さんは先見の明があつたといふ譯ですね」わざと清は軽くこんなことを言つた。

三度目に逢つたのは、母親が今夜六時の汽車で立たうとする日の午後であつた。母親より一足先に、敏子は子を負つたり大きな包を持つたりして違つて来て、「まだ、母さん来なくつて？」と泣きさうな顔をして居た。やがて母親は来た。

「もう、敏子さん、歸らぬ積で来たんですつて」かう細君は書齋から出て来た清に言つた。清は座敷に行つた。



「一體何うしたんです？」  
やがて入つて来る敏子の方を向いて、笑を含みながら清は訊いた。

「だって、先生、到底駄目なんですよもの」

かう言つて敏子は清の方を見た。

「駄目つて、何ういふ風に駄目なんですか？」

「先生は御覽にならないから、よくお解りにならないでせうけれど、此頃はそれは酷いんですよ。家だの、子供などは丸で構ひつけないのですから」

「面白くないから、馬橋君はわざとさうするんでせう？」

「けれど——」と敏子は激して、「わざとそんなことをするつていふ法があるでせうか、一家の主人ぢやありませんか」  
清は笑ひながら、

「それはさうだけれど、さう一概にはかりも言はれないよ。矢張、男の心持つて言ふやうなものがあるからね……」  
聞を置いて、「僕には馬橋がさうする心持がよく解るね。」

「何うしてでせう？」

「母様が入らしたつたことなども原因になつて居るんだらうがね……」かう言つて少し考へる風をして、「一體、夫婦とか家庭とか言ふものはさう好いもんぢやないからねえ。忍耐といふことが無くツちや、一時だつて成立つて行きやしないよ」

「先生は御覽なさらないから、さう仰しやるけれど——」

敏子は言ひ懸けて低頭して了つた。

「母様——何うでせう。私はさう思ふんですがね……」清は母親に向つて、「何うも感情に支配され過ぎると思ふんで



すがね』辯解しかける母親を造つて、『それはさうでせう。問を割く……さういふことはなさらんでせうけれど、何うしても、今の境遇で、時々逢つたり何かすると、何うしてもさういふ邪推は起りますからな……それに、私なども経験がありますけれど、馬橋位の若さで一軒やつて行くといふことは、物質上から言つても大抵ぢやないんです。馬橋君などは年から言へばよく遣つて行く方でせう。』

『何うもこれも我儘者ですから』

母親はかう言つて、いろ／＼細かい話をした。

『まあ、先生も居らつしやることですから、……いよいよ仕方がなければ、それは何うにでもなりますから、私が歸つてから、今少し容子を見る方が好う御座んせう——』

母親は沈着いた調子で言つた。

『とても駄目なんですけど』

母親が眼を告げて歸つて行つてから、敏子は獨語のやうに言つた。

『でも、餘り早過ぎるからね』

かう清が笑ふと、

『先生はすぐあゝ仰しやるけれど——』考へる様子をして、

『だけど、仕方がない。私もさう言はれるわけがあるんですから……けども先生、先生も是非一度来て見て下さい、馬橋が何んな生活をしてゐるか、御覽になればすぐ解りますから』

『その中行つて見やう』

しかし清は行く氣はなかつた。



## 四十五

愈々馬橋と離別したいと存じます。その譯は、とても、私共二人は一緒に居られさうもないからです。馬橋は何時でも貴様なんぞに藝術家の心が解つて堪るもんかと口癖のやうに申しますが、馬橋の心では、つまり藝術家の家族は犠牲にならなければならぬと言ふのです。如何にも犠牲にもなりません。しかし馬橋のやうな間違つたものゝ犠牲になるのは私は厭です。まだ今日までこんなことを申上げたことは御座いませんが、その無責任

たら、御話にも何にもなりません。いつでしたか如何無責任なんだねと先生から訊かれたことが御座いましたつけ。如何ッて一々は申上げられませんか。朝から晩まで私達の生活を御覽なすつて始めてわかることゝ存じます。家族が何んなに困つても、藝術家たる良人自身は仕度い三昧のことをして好いのでせうか。酒を飲んで酔ひ、酔に乗じて遊び歩く、其金はあつても、子供の薬價は出すのが馬鹿馬鹿しいと言ふやうなことを言つても好いものでせうか。そんなのが藝術家ではありません。貧乏するのは私は構ひません。しかし藝術々々とそれを口實に、不眞面目な眞似をして歩いて、借金の申譯をさせられて、犠牲呼



ばりをされるのは私は厭です。

こんなことは申し上げたくはありませんけれど、今月は二圓しか俸給を持って歸らないのです。そして社に前借が十五六圓もあるといふ事です。友達にも迷惑をかけて居るばかりではなく、子供の病氣の時にも、ヤツと私の本を賣つて診察料や薬代を拵へるやうな始末、——そのまた金を、やれ車代を出せの、やれ酒を買つて來いの、敷島を買へのと皆な遣はせられて了ひました。何しろ質屋に行く時でも車に乗らうといふ人なんですもの。

馬橋の身を立てたいと思へばこそ私も苦勞をしたのです。それがこんなことでは失望するより他に仕方が御座いません。

序ですから申しますが、馬橋は今度社をやめました。それにもいろいろ事情が御座います。私は酒や女を買うことばかり覚えて碌々讀書することも出来ない今の境遇よりも、結局浪人しても、質實な生活を送りたいと思つて居ましたから、社をやめることは不賛成では御座いませんでした。しかし女記者を困らせない爲めに犠牲になつて退社すると言ふことが男の意氣地でせうか。借金をして、人の厄介になつてゐて、そして人の世話をする氣が私には解りません。今月ももう五日になります、馬橋は何うして居りますことやら。

昨日はたまたま家に歸つて居りました。其處へ友達が來ましたが、午後から行く處があるといふのを無理に引留



めて酒を出して酔拂ふといふ始末なんです。私も子供も病氣して、ことに私は發熱して苦しんで居りますのに、これから金策に行くから質屋へ持つて行くものを出せと申すんでせう。これまでの経験で、こんな時に出して無事に歸つた例がないんですから、今日はやめたら好いでせう。私も苦しいから家に居て下さいとかう申しても、言ふことをさかす出て行かうとするのを、無理に追かけて行つて、歸つて貰つて、夕方までそれでも寝ました。三十分ほど子供を見て貰つたら、何んなに苦情を申されましたことか。

で、馬橋も夕方まで前後不覺に寝て居ました。私は少し楽になつたので、朝の中は客で出来なかつた襪擦の洗濯をしたり、晩飯の支度などをして居ますと、其處に平生

親しくしてゐる友達がやつて來ましたから、私は馬橋を起しました。と、何うしたんですか、突然私を打つちや御座いませんか。灯をつけるんですか、それでも私はこらへてかう申しますと、當り前だ！ぬけつ毛のおたんちん！かうなんです。

今から考へて見れば、馬鹿々々しい。怒ることもないんですけれど、突然に打たれては居ますし、それに此頃は何ぞと云へばおかめだの、おたんちんだのと悪口されるので、口惜しくなつてつい言争ひました。と、又外出して金策するといふではありませんか。私がかういふ時には出してはならんと知つて居ますから、いろいろ引留めたり争つたりして、終に離別を申出しましたけれどそれは取合つて呉れません。終には私も焦れ出して、家も何



も焼いて了ひたいやうな氣になり、盛にマッチを擦つたり何ぞしたもんです。

でも漸くいろくに申して、一緒に先生のお宅に伺ふことにし、戸外に出て戸緊りを致し、いざ出かけやうとする時、もう居ないので。通りに出て見ましたが其處にも居りません。引返して又其處等をたづね廻りましたけれど遂に見當らず、止むなく其晩は家に引返しました。さて其翌朝、差迫つた用事の爲め質屋に行かなければならないので、其序に心當りの友達の下宿に行つて見ますと、思つた通り、馬橋は友達と一緒に居ました。

そして京橋に行つて金策して午後一時頃には家に歸るか、質屋の方をよくして家に歸つて居る、先生の家に行くことは？と聞きますと、それは歸つた上でよくすると申

しますから、私は歸つて参りました。

處が今、夜の四時ですが終に歸りません。此頃は金さへ持てば、何うしても酒を飲まなければ承知しないので、京橋へ行つて、いくらか原稿料を前借して、例の銀座に行き、酔ふと例の感興を仕舞まで追はなければやまれな

い質ですから、馬鹿な真似をして歩いてゐる事です。家族を犠牲にするといふ意味を、そんな風に思つて居るんですから、とても駄目だと思ひます。

馬橋と別れて後、幸福であらうとも思ひません。何うなることか、私にも解りませんが、今のやうな有様では、私忍びきれません。ヒステリーになつて狂氣するかも知れないと思ひます。

馬橋だつて別れることに不賛成ではないと思ひますから



誠に御迷惑ですが、御盡力下さるやうに願ひ上げます。子供の籍のことも私には解りませんから、これも何分よろしく御考へ下さい。先生！何うか今一度先生と呼ばせて下さい。

十一月六日夜

敏子

先生おもと

この長い手紙は新聞社の原稿用紙に薄墨で走り書に書いてあつた。處々字が脱けて居たりした。

初冬の晴れた朝であつた。日影が半明けた窓障子から明るくさし込んで、机の上に取りひろげられたこの手紙を鮮かに照した。庭の垣の縁にある茶の花や、紅白の山茶花や、薄霜にぬれた椿の葉や、處々紅葉した楓や、それがすべてくつきりと晴れた空気の中に見えて居た。

書齋にも庭にも人は居なかつた。



四十六

「新しい女だとか何とか言つても、矢張平凡な幕を打つたね」何時か西さんがかう敏子のことについて言つたことがあつた。清は愈々平凡になつて行く長い物語を讀むやうな気がした。

馬橋から清に宛てた手紙が来たのは、其翌日の夕暮であつた。それには二人は結局別れる方が好いと思ふから、自分から身を引くといふことが二三行簡単に書いてあつた。そして他は萬事敏子から聞いて呉れとしてある。敏子に宛

てた方には、家を畳むに就いての處分がザツとしてあつて、末に、卿等の健康を祈ると大きく書いてあつた。

かうなつては、もう放つて置けなかつた。敏子が病氣の身で子供を抱いて、暗い一間に、懊惱して居るさまも眼に見えるやうに思はれた。あの神経過敏の女は何んなことをするか解らなかつた。

「お國さん、一つ行つて見て下さい」

かう手紙を見せて清は頼んだ。

「別れて了ふ方が結局二人の爲めにも好いんでせう……とてもあんな風にしていつ迄も暮しては居られないでせうから」其後度々訪ねて行つたお國さんは、かう言つてすぐ出懸ける準備をした。

風の寒い晩であつた。



お國さんの出懸けて行つた後を、清は一人密齋で机に向つて筆を執つて居た。家の周囲をガサ／＼とところがる落葉の音が絶えずさびしくあたりに聞えた。清はいろいろなことを考へずには居られなかつた。かれは書きかけた筆を置いては幾度か長大息を吐いた。時には筆を持つたまゝ頰杖をして、じつとランプの灯を見詰めて居たりした。

子供を一人抱えてかうして男に別れて来る敏子も可哀相であつた。此寒い夜を家を捨て職を捨て女を捨て、何處ともなく彷徨つて居る馬橋も可哀相であつた。この二人の間に入つて、進むことも退くことも出来ずに、かうしてランプの灯を見詰めて居る自分の身も可哀相であつた。かれは過去と將來とをつくづく考へた。

「自分が敏子を愛したといふことが、かうした三人の運命

をつくる基となつたのは、それは事實だ。自分にも無論責任はある……それは自分も知つてゐる。しかし自分だつてこれに對して、随分多くの犠牲を拂つた。家庭の荒廢、心の荒廢、隠すことの出来ない精神の荒廢……」

かう思つたかれは黯然たらざるを得なかつた。

「誰れが悪い？ 自分が敏子を愛したのが悪いのか？」かう自問自答して、「普通の道徳——多くの人の常識から見れば、かうして女弟子を愛するといふことが悪いと言ふに違ない。しかし實際愛したのが呪べきとであらうか。愛したのが呪はれるといふよりも、寧ろ愛するに至つた事情——自分と敏子とが偶然相逢ふに至つた縁が呪はるべきではないだらうか。……それに自分は尠くとも馬橋の爲めに盡した。又盡す考へでもあつた。二人の戀人の爲に犠牲になることを



敢て辭さなかつた。しかし三人の間にはこれさへ實行が出来なかつたのである。自分と馬橋との間にはかうした犠牲が行はれ得る餘地すらなかつたのである。」

それからそれへと考へが容易に盡きやうともしなかつた。

かれは終には筆を捨て、じつとして座つて居た。

落葉の夜はさびしく更けた。

四十七

丘を越えて行つた處に、松林やら島やら田舎道やらに圍まれて一軒空いた長家があつた。それについて曲つた細徑は落葉に埋れて、踏むとガサガサと音を立てた。お國さんと鏡子との並んだ姿は、ある朝其處から竹藪や樺や樫の木などの中に低く見える茅葺屋根の百姓の家へと下りて行つた。

貸家は其百姓の持家であつた。

「私の家に置くと云ふ譯にも行かない。何處か好い處があ



るなら、二人で一緒に家を持つのも面白からう」  
かう清が二人に言った。

「ぢやさういふことにしませうね」かうお國さんに言った  
敏子の顔には、新しいライフでも開けたかのやうに生々し  
た色が上がった。

「ぢや、さうしませう。一緒にやりませうねえ」

お國さんも嬉しさうであつた。

「まア、少しさうして静かに落附いて、ゆつくり保養する  
な……」

清は瘦せた蒼白い敏子の顔を見た。

お國さんは、近郊を散歩した時に、其の松林の中にかし  
家札の白く浮出すやうなのを見て置いた。かういふ静かな  
處に住んだら好いだらうとも思つた。で、二人は一番先に

入  
り

其處に出懸けた。

大家の百性の入口は、此處等の農家によく見るやうな廣  
い土間になつて居た。髪を箒のやうにした上さんが、此處  
等には見馴れない若い庇髪の二人の女を訝かしさうに迎へ  
たが、やがて駒下駄を突かけて、島に居る主人を迎へに行  
つた。

大家は三十四五の莞爾した人の好ささうな男であつた。  
筒袖に股引といふ島姿で、其儘二人を貸家の方へと連れて  
来て、裏口から戸を明けて見せた。六疊に四疊半の二間。  
冬の朝日が窓からさして、松の風に鳴る音が微かにした。

「好いわねえ」

かう敏子は言った。

お國さんは井戸の水を汲み上げて見たり、隣に住んで居



る人の生活を覗いて見たりした。其處には、朝日を受けたところに暢氣さうに座つて、三十近い男が頻りに竹を細かく割る仕事をしてゐた。三毛猫が日向に寝て居たが、お國さんが覗くと、延びをして立上つて、ちつと此方を見て、そして向ふに行つた。

竹を割る鉦の音が絶えず聞えた。

「少し遠いけれど好いわねえ」

二人はかう話し合つた。屋賃の廉いのも都合であつた。午後には清がお國さんにつれられて其處に行つて見た。

「成ほどこれは好い。物を賣いたり何かするには持つて来いだ。……僕が借りたい位だ」四邊を見廻して、「かういふ處に居れば、敏子さんの爲めにも氣が落附いて好いだらう。まア、子供の處分が定まるまで、此處にじつとして居るん

だね。……貴方は大變だけど、少し世話をしてやつて下さい」

田舎の町家に育つたお國さんは、勝手元でも裁縫でも何でも出来た。

小石川の兄の家に行つて金を拵へたり何かして、成るべく必要な物は賣らぬやうにして、馬橋と住んで居た家を疊むことに其日は暮れた。

箆筒や火鉢を載せた一臺の荷車は、あくる日の午前、丘から丘をこえて、さびしい松の林の中へと行つた。破れた四目垣を繕つて居る筒袖の大家さんの姿は、車から荷を卸す車力や、棒がけになつて働いて居るお國さんや、常盤木の葉にチラチラする日影などの間に繪のやうに見えて居た。



「コンヤノキウコウデカヘル」

馬橋がかう大阪から電報を打つて寄したので、人々は今更のやうに周囲を振返つて見た。「今更そんなことを言つて寄したつて仕方ありませんわねえ」かう言つた敏子の顔にも動搖が見えた。折角始めた新しい生活がその爲めに破れはしないかとお國さんは心配した。清も二人の編緯の容易に離れられないのを思はない譯には行かなかつた。

清は一面馬橋の心事を解すると共に、一面これに對する

處置の方法を考へる人であつた。乗り出した船はもう行く處まで行かなければならなくなつて居た。

「折角出て来たんだから、後戻するのは恐だ。新しいライフを開くやうにしなければいけないからねえ」

清はかういふ意見であつた。

清は馬橋の訪問を豫期した。一日は一日と過ぎた。しかし其姿は遂に郊外の家に見えなかつた。「馬橋さん、歸つて来て見て、家が疊んであるもんだから、もう駄目だと思つたと見えませぬえ」暢氣な細君はこんなことを言つた。

肥つた可愛い子を負つたり抱いたりして並んで歩いて行く二人づれの庇髮姿は、電車の停留場に行く丘の上やら屋敷町やらに常に見られた。霜の白い朝もあつた。風の林を鳴らす夕もあつた。里川を堰ぎ留めた路傍の物洗場には、



大根の白いのが際立つて見える日もあつた。十二月の晴れた日はよく續いた。

別れて来て、一番先に子供のことが心配になつた。子供といふ繩絆を離すことが、敏子に取つては、新しいラインに入る第一歩であつた。馬橋から電報を受取つた當座には、殊にそれが必要なのを人々は感じた。敏子は一生懸命になつて、近い田舎に里子にやる口をさがしに行つたり、學校に居た頃親友であつた女に一伍一什を打明けて力を借りやうとしたりした。汽車の中で乗合せた子を亡したといふ女が、預つて上げてても好いと言ふのを頼りにして、本所の場末までわざわざ出かけて行つたことなどもあつた。一時馬橋と一緒に身を隠して居た九十九里の濱の主婦にそれを預けることになつてつれて行つたが、四五日して、泣いて泣

いてとても御世話が出来ないからとて歸して来た。

子供は若い母親の膝に抱つて、莞爾と常に可愛い顔をして居た。「静ちゃん、静ちゃん」とお國さんがあやすと、躍り上るやうにして高笑ひをした。清の家に抱かれて来ては子供等の大勢集つて騒いで居るのをめづらしさうに見て見ることなどもあつた。

「まあ、そんなに大騒ぎをして里子にやらなくツても好いちやないか。その中、何處か好い處があるだらうから。」かう清は敏子に言つた。

丘の上の家の生活は、二人に取つて珍らしく自由な生活であつた。世を遠くかけ離れたやうな氣になつて女達は暮した。茶湯臺に長火鉢に箆筒。お國さんは机を四疊半の窓障子に向けて据ゑて、其處で雑誌の小説を讀んだり、書き



かけた原稿の筆を續けたりしてゐた。敏子は片時も傍を離れない子供を相手に、茶湯臺の上で硯を持って来て、國の母親に違ふ長い長い手紙などを書いた。

四十九

敏子は蒼い顔をして居た。生々と張切れるやうに肥つたお國さんに比べては、かうも違ふかと思はれるほど體も弱々しさうに見えた。何ぞと謂つては、黙つて物を考へた。朝は二人はいつも遅く起きた。お國さんが筒袖を着て井戸端に出る頃には、隣では竹を削る音がもう聞えて居た。隣の男は村のもので、兄が副いで居る本家が其近くにゐつて、白髪のないお婆さんが時々違つて來るといふこと



も段々解つて来た。箒を編むのが職業で、豫定の敷が出来上ると、それを車に載せて問屋に運んで行くのが時々見えただ。尺八を吹くのが好きで、夜は其音が壁を隔て、聞えた。「そらまた始つた。暢氣ねえ」

と女達はいつもかう言つて笑つた。

湯屋はかなり遠かつた。二人は夕日の餘照にかゝやいた丘を越して、新開町の中程にある新しく出来た湯によく遣つて来た。そして歸りにはいつも清の家に寄つて行くのを例として居た。二人は湯上りの綺麗な顔を光らせながら、洋燈の明るい茶の間で、遅くまで楽しんで話して行つた。「もう十時よ」と敏子が心地よげに眠つた子を膝にしたまゝ、柱の時計を見てかう言ふと、「さうね、餘り遅くなると、あの森の處が怖いわねえ」などと言ひながら、お國さんは猶

熱心に話し込んで居た。

「今の若い人は違ひますねえ。こんなに遅く、あの淋しい處を歸つて行くんですねえ」かう細君は感心した。

闇の夜にはそれでも提灯を借りて行つた。

大家にも近所の人にも二人の何者かが長い間解らなかつた。通つて来る路傍の人々も、子供をつれた底變の二人づれを訝しさうに見送つた。ある時などは酒屋のお用聞らしい男が、すれ違ひながら、

「あれか、あれは初谷の女だよ」などといつれの男に言つて居るのを二人は聞いたこともあつた。初谷とは二人の住んで居る土地の小字である。

「初谷の女は面白いねえ」それを聞いた清はかう言つて笑つた。



それから二人はよく揃つて町に出かけた。三越に呉服物を見に行つたり、貯へて置く品物を買ひに行つたりした。時には、夕方からわざわざ寄席に出かけて行くことなどもあつた。義太夫や芝居の話や敏子はかなりよく知つて居た。踊の話などもして聞かせた。

ある日、町の通を歩いて居た二人は、電燈の笠や器具などを賣つてゐる店の飾付の前に足を停めた。懐中電燈が眼を惹いたのであつた。

「買ひませうか」

「買ひませう」

二人はかう言つて、店の中に入つた。番頭から詳しく説明を聞いて、かれ等は懐中電燈を買つた。

で、その懐中電燈は停留場から丘の上の家まで、いつも

闇の路を照した。

野は段々寒くなつて行つた。霧の深く籠めた朝は、朝日の影が金色をなして彩られた。木枯の吹く夜は、松の嵐が潮のやうに鳴つた。二人は新しい年をこのさびしい幽棲に迎へた。

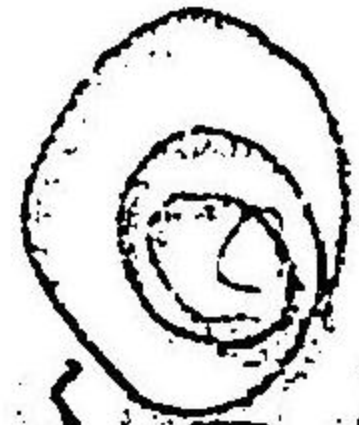


その正月には、田舎の寺の山崎が遊びがてら久し振で遣つて来た。敏子が歸つて居るといふ話は妙なからずその心を動かしたやうであつた。

「はア、左様かねえ……」

深く感じたやうな調子で、「歸つて居るのかね。あれほど思つても、矢張駄目だったかねえ」

「皆なさまつた型の中に入つて行くんだねえ、君。……いくら張いたつて、立派なことを言つたつて、自然には敵は



ないねえ。」

「本當だねえ」

山崎は頭を振つた。

「戀だとか何とか言つて、大騒ぎをした處で、それは何にもなりはしないのさ。時は忽ちにして過ぎて行つて了ふのさ……。」山崎の顔を見て、「僕等の時代だつて、矢張さうだつた。夢中になつて、女の愛を求めて歩いたものだつた。僕等の最初の「詩集」、あれが出来た時分のことを考へると、本當に君、隔世の感どころぢやないねえ。あの詩集を田邊と一緒に澤神に獻するんだなんて言つて、華嚴の澤に投り込んだことがあつたが、その田邊はもう此世の人ではないし、西は西で、此頃では、國家の爲めなぞといふことを考へて居るやうになつたんだからね。……」



「不思議なやうな気がするねえ」

「不思議！本當に不思議と言へば不思議以上だ。それからまたちやんと未來が平凡に定つて居ると言へば定つて居るのだ。平凡な中の不思議、不思議の中の平凡、さう言つたやうな深い細かい處があるねえ。自然はちやんと其行先を見せて置いて、そして刹那の上では、人間に見すかされないところがある」

「すぐ言葉をついで、

「だから刹那を重んずるといふ考になつて來るんだねえ。君。刹那の快樂なり悲痛なりに意味があるので、それから來る結果などは何うでも好いといふ譯になるんだねえ。僕等にしても、戀とか女とか言ふものには、かなり知識がある積だが、いざとなると盲目だからねえ。」

「それで人間は生きて居られるのさ。解でもさういふ境を説いて居るよ。」

「敏子などを例に取つても矢張さうだ。行く先はちやんと解つて居る。しかし解つて居るからと言つて、その統一された自然の法則とか何とか言ふやうなものに由つて支配されては居ないからな。いくら経験したものが口を酸くして言つて聞かしたつて、説いて聞かせたつて、私達も経験しないでは解らないからと言つて新規直しをいつもやる、そしてその新規直しが平凡な、型にはまつた、人間が何千年來巻返しくり返し遣つて來たものであらうが何うだらうが構はない。それが自分の経験だと言つて、それを唯一の證據にして生きて居る。」

「觀照的になるといふことは、生氣を失ふ最初なんだ。や



つて居さへすれば、其處に生々とした火が燃えてるんだ。」

『さうだ』

深く冥想するやうな顔をして清は言つた。

二人は暫し黙つた。

『しかし、我々も我々の後に續いて来た「新時代」の人々について、さういふ風に見えるやうになつたんだからな、もう……』清はかう言つて、昔を思ひめぐらすといふ風をした。

『早いものさ、もう我々もまごまごすると老人の部に打込まれるんだよ』山崎はかう言つて笑つたが、其處に清の長女の明けて十一歳になるのが入つて来たのを見て、

『もう、此人達の時代もすぐだ！』

『本當だ。親に打明けて言れないやうなことが出来るのも

もうすぐだ。』少し考へて、『我々はつまり始めもなければ終りもない大きな物の中で、ある力に操られて生存して居るやうなものだねえ。今になつて、過去と將來とを考へて見ると、ライフの無意味の中の意味と謂つたやうなことがいくらか解るやうな氣がするよ。田邊が死ぬ前にかうして死んで行くと思ふとつくづく悲哀の情に堪へないと言つたが、僕等もそれを考へると、厭世ならざるを得んねえ。事業だとか戀だとか名譽だとか言つたつて、それこそ砂の上に書いた字だ。』

『それで居て、多くは事業とか戀とかさういふ現實に苦んだり悶へたりして、大抵は居るんだから面白いのさねえ、人間は。』笑つて見せて、『或は人間と言ふものは、思想などといふものを捨て、本能で生きて居る方が眞實なのかも知



れない……少くとも、さうした方が、君のいふ自然には近  
いねえ。何も我々は現象に願はれるものから矛盾だとか不  
合理だとかを探し出して、それをぐつくづ言ふには當らな  
い。敏子さんのとだつてさうだ。成るやうにしかかつて行  
かなかつたぢやないか。君はいろいろに先生の爲めに計つ  
たけれど、少しもそれに影響された形はないぢやないか。」

「本當だ」

清は黙つて過去を顧みた。暫くして、

「しかし影響されざる影響——何と言つて好いかな、縁と  
言つて好いかな、運命と言つて好いかな、さうしたものが  
間接には働いて居ることは事實だねえ。人間と言ふものは  
糸から糸を引張り出して、それが段々結んで解けなくなる  
やうなところがある。」

「矢張佛の言ふ煩惱の一つから、縁因が起つて來るんだね  
え。」

かう言つたが、山崎は急に、

「それで、何うするんだ、敏子さんは？」

「何うするつて、矢張一人で藝術をやらうつて言ふんだら  
う！」

「難かしいもんだね」

「それに、子供が居るからね、それを何うかしなければ何  
うすることも出来ない。」

「今、一緒に居るのかえ」

「さうさ」

「自分で育ててるッていふ譯にも行くまいねえ」かう言つて  
山崎は考へて、「何んな子だえ？女の見たつたねえ？」



「さうだ……一寸可愛い兒だよ」

「僕が育て、やらうか」

突然かう山崎が言ひ出した。

「でも……君が育て、呉れるッて言ふ譯にも行くまい」

「笑ひながら清がかう言ふと、

「何に、構はんさ。今一人位子供がなくつちや淋しくつて

いけないんだよ。君の子供を一人呉れると好いけれど、君

は中々手離しが出来さうにもないからねえ」

山崎の言ふことは滿更戲談でもなかつた。

子供一人しかない山崎夫婦に取つては、田舎の寺の庫裡

は餘りに廣く餘りにさびしかつた。此前にも、「何うだ、此

次生れたら僕の方に寄さなくつてはいかんよ」清の細君は

兄からこんなことを度々言はれて居た。

其日の午後清は山崎と一緒に、その丘の上の家を訪ねて  
行つた。穩かに晴れた日で、赤や青で飾り立てた初荷の馬  
が、ポックリポックリ野の道を通つて行くのが見えた。



三月のある寒い晩、さびしい田舎の停車場を下りた敏子とお國さんは、其處に一臺あつた車を頼んで、行李やら支那靴やらを載せて貰つて、大通の方からぐるりと山崎の寺の山門の方へと行つた。

庫裡の戸はもう閉めてあつた。西風は凄じく裏の森を鳴して、薄暗くなりかけた境内には、ところどころ落葉が吹寄せられて居た。

やがて出て戸を明けた主僧は、其處に夕暮の空気に白く

浮出した二人の女の笑顔を見た。

「おや……」

かう言つて、「大變に早かつたですね……明日かと思つた二人はやがて奥の廣い間に通された。其處にはもう洋燈が薄暗く點いて居た。負つて居た子を敏子が下ろすと、俄かに眼を覺して聲を立て、啼き出した。「よしよし、静ちゃん、啼くんぢやない。啼くと怖いよ」かう言つて、敏子はそれを抱上げて、胸をひろげて乳を飲ませた。

二人は一月ほど前に東京を出て、お國さんの故郷に近いある温泉場に行つて居た。其處は雪の降り積る寒い寒い處であつた。敏子の神経衰弱、それにお國さんも故郷に少し用事があつた。「そんな寒い處に、風邪を惹きに行くやうなものだ。温泉なら、熱海とか湯河原とかもつと暖かい處が



いくらもあるぢやないか」かう其時清は留めた。しかし二人は何うしても其處に行きたかつた。「雪國の温泉も見たいわ。それに、先生は私は寒い處は嫌ひだと思つて居らつしやるけど、私の故郷の町だつて、冬は矢張雪の中ですよ。……」敏子はかうも言つた。二人は其處に一月を過して、歸りには山崎の田舎の寺に寄つて、其處で子供を寺の人達に馴染ませて置いて來やうといふ心組であつた。

子供の籍は、山崎が歸ると、すぐその手續を済して寺の子にして了つた。

二人は世離れた雪の中の温泉場で自由な氣儘なしかし退屈な一月を送つた。其處では快活な面白い中年の筆行商に惡意になつたり、近くの町の富豪の細君と往來をしたりした。女ばかりの旅を怪まれて、刑事につけ覗はれたことも

あつた。戸外には雪が深く深く積つて、川を隔てた向ふ側の町との交通も全く絶えて了ふ時であつた。二人は湯に入ることに、菓子を食べふことと子供を相手に遊ぶことと、それより他には用事もなかつた。「今、静ちやんを二人で押へて鬘をかいてやつて居る處です」清に寄した長い手紙の終にお國さんはこんなことを書いた。

お國さんは今日汽車の中で、大きい鞆を持つて長い説明をする行商の男から、蛸だの狸だの蛛などの針金細工の玩具を買つて來たが、それを袂から出して、其處に來てきまゝり悪さうに坐つて居る寺の娘に遣つた。娘は喜んで箱の蓋を明けて、一つそれを手に持つて見たが、蛸の手だの足だのがブルブルと動くので、氣味悪がつて、すぐそれを畳の上で落した。



「怖くはないのよ」

敏子が傍から言ふと、其處に火鉢を運んで入つて来た主僧は、「何ですわね、それは……。好いものを買つたね、お前かう言つて、自からも手に取つて、「これはめづらしいもんですわね」と動かして見て笑つた。

お國さんは、包の中から温泉土産の煙草箱を續いて出した。

「これは難有う、こんな心配はしない方が好いのに」火鉢の火を積直して、「寒かつたでせう。お當んなさい」

「いゝえ、ちつとも寒くありませんの。寒い處から来たんですから」

「本當ねえ、餘程遠ふのねえ、梅があんなに咲いてるんですものねえ」

かう敏子も言つた。

丁度其處に出て来た肥つた背の高い上さんは、田舎訛の言葉で、女達に型のやうな挨拶をしたが、やがて敏子の抱いて居る子供の方を覗くやうにして見て、「おゝ好いお子さんですことねえ！」

上さんは丸で見違へるやうな敏子を見た。其時分の鮮かなはつきりした眼、房々した髪、人の心を惹かなければ置かないやうな姿はもうなかつた。

夕飯は汽車の中で済して来た。でも、まアと言つて上さんは勝手の方に行つた。

滅多に點けたことのない五分の臺灣燈に、室は見違へるやうに明るかつた。赤い絨をかけて雑誌や小説を載せた机や、英語の金縁の書籍のすらりと並んで居る本箱などを後



にして、主僧は女達の白い顔と相對して坐つた。

「明日は一つ本堂を掃除して、其處に住はれるやうにして上げませう。鳥渡世間離れがして好い處ですよ。……淋しいには少し淋しいけれど」

主僧がかう言つて笑ふと、

「いゝえ、淋しい方が却つて好いんですよ。……ねえ敏子さん。」

笑ひながらわざとお國さんが言つた。敏子は寺の淋しいのを前から氣にして居た。

「まア、あんなことを」

敏子はやさしく睨めて見せた。

主僧が笑ひ懸けて手を出して子供を抱かうとすると、敏子は啼き出して母親の方に體を反した。これに限らず、一

度九十九里に遣られてから、片時も母親の膝を離れないやうになつた。お國さんでさへ顔を反けた。

やがて饅頭を盛つた膳が其處に並んだ。主僧は酒を一本つけさせてそれを女達に勧めた。しかし女達は盃を後へ遣つて注がせなかつた。酒量の無い主僧の顔はやがて赤くなつた。

其處を片附けて、床を敷いて、二人が寝たのはもう十時過ぎであつた。お國さんの丈夫さうな呼吸を聞きながら、敏子は長い間眠られずに居た。裏の森を渡る西風の音が吼るやうに物凄く聞えて、隙間の多い雨戸はガタガタと鳴つた。

翌朝、敏子はお國さんに言つた。

「貴方は本當によく寝られるわね」  
「何うして？」



「何うしてッて……床に入るとすぐ眠つて了ふんだもの。本當に苦勞がなささうね」

「だつて、床に入れば寝るのが當り前ぢやなくつて」

お國さんが笑つて言ふと、

「だつて、本當に憎らしいやうに。私、寝られなくつて困つたわ。明方とろとろとした位よ。貴方と私とでは體からして違ふのね」

「でも、貴方のやうに苦勞性でも困るわねえ」

長い間閉め切になつて居た本堂の一間の戸は、やがて明けられて、明るい朝の日影が流るゝやうに射し込んで来た。其處は六疊で、隣には本尊の如來様が色の褪めた古い幔幕のかげに寂然として立つて居た。賓頭願や位牌や燭臺や木魚や鉦や——さうした古びた者ばかりの中に、つい此頃撞

下から寄進したメリンスの鉦の打敷の色模様だけが新しく鮮やかに眼に立つた。女達は其處に夜具だの行李だのを持つて来て、何彼と自炊の準備をした。机だの洋燈だの火鉢などは主僧が自から運んで来て貸して呉れた。さびしい寺が俄かに賑かになつて来た。笑ふ聲や子供をゆやす聲などが中庭を隔てゝ常に聞えた。



五十二

庫裡から本堂に通ずる長い廊下には、時々軽い草履の音がして、庭の常磐木の葉の間に女達の衣服の色彩などがチララした。主僧が朝など行つて見ると、七輪の土瓶からは白い湯気が上つて、お國さんがいつも一生懸命に朝食の準備をして居た。

「お汁でも上げませうか」

「いゝえ、拵へましたから」

お國さんは味噌を澤山磨つて置いて、毎朝二人が用ゆる

だけを熱湯に溶かして簡單にそれを拵へて食つた。鹽引、干物などを町から買つて来て置いた。鹽の吹いた鱈の目刺は口が歪むほど鹹かつた。

二人はよく出懸けた。停車場前に郵便を出しに行つた次手に野を道通つて見たり、湯に行つた歸りにさびしい寒い町を歩いて見たりした。其頃、町の外れの芝居小屋に女役者が乗り込んで来るといふ噂があつた。ある晩、二人が野菜を買ひに八百屋に入つて行くと、其處に居た中年の男が突然、「芝居はいつから始まるんけえ」と聲を懸けた。二人は始めはそれは自分達に言つたのとは氣がつかかなかつた。

「お前さん方、芝居の来ぢやねえんけ」

これで始めて女役者に間違へられたことが解つて、二人は噴飯して笑はずには居られなかつた。溝に添つた暗い道



Red day

を歩きながら、「女優に間違へられるなぞ本當に日記に特筆  
大書して置いてもいいわねえ。一代の名譽ねえ」敏子はこ  
んなことを言つて、轉げるやうにして笑つた。

田舎の町の人々には、並んで歩く二人が珍しくとも異様に  
見えたに違ひなかつた。「西洋人！西洋人！」などと敏子を指  
して言つた鼻涙垂しの子守もあつた。

敏子はをりをりに立つほど鬱ぎ込むことがあつた。温  
泉場に居る頃にもそれが度々あつた。お國さんも始めは氣  
にして、いろいろ慰めて遣つたり何かしたが、後には例の  
癖と打捨て、置くやうになつた。お國さんなどの知ること  
の出来ない苦勞の種が敏子にはあつた。

「もう好いちやありませんか。そんなに思つたつて仕方が  
ないわ。本當に新しい生活を始めませうよ」それでもお國

さんがをり／＼見かねてかう言つて慰めると、「しかしあつ  
たことはあつたことね。あつたことをなくする譯には行か  
ないわねえ。追根と言ふことは辛いものねえ」

かう敏子は言つた。それなら *Complicated* ...

ある日、夕日のさびしく射した本堂の前の廣場を見なが  
ら、敏子は子供を抱いて立つて居た。蒼白い顔には、例の  
憂鬱の色が見えた。

葉の無い銀杏の樹の向ふに、不動堂の屋根が見えて、其  
高い縁には、子守が二三人遊んで居た。

其處に、お國さんが来て、

「何うかして？」

「いゝえ……」

敏子は強ひて笑つて見せたが、しかし眼には涙が満ちて



居た。やがてしんみりした調子で、

「運命と言ふものは不思議なものねえ。馬橋が幼稚い時、

矢張お寺で育てられたんですつて。この子も、かうして此

處で育てられるツて言ふのはねえ、」

お國さんも黙つて了つた。野には夕暮の雲が通つた。

（お國さん、馬橋が幼稚い時、矢張お寺で育てられたんですつて。この子も、かうして此處で育てられるツて言ふのはねえ、）

（お國さんも黙つて了つた。野には夕暮の雲が通つた。）

五十三

二人が寺に居る間に、清も一度東京から訪ねて行つた。

其時も久喜あたりで乗客は大抵下りて了つて、二等室に

は清の他に足利あたりの商人らしい男が一人乗つて居るは

かりであつた。夕日が車内に一杯にさし通つて、遠くに碧

い山を見せた平野は、村やら林やら川やらを段々其前に開

いて見せた。其日は何故か清の胸は微かな顫動を感じて居

た。敏子に就いての追憶が連のやうに靜かに綾をなして打

寄せて來た。



物語の中の一巻を一頁一頁と翻して居るやうな気がして仕方がなかつた。かれはこれから先の一巻を考へた。また最後の一章のいかに結ばれて行くかをも想像した。青年からの親友で且つ妻の兄なる山崎が、かうして敏子の子を養育することになつたといふことも一種不可思議の縁のやうに思はれた。

その敏子の子が成長した後のことも想像しない譯には行かなかつた。かれは五年後、十年後に此の同じ線路の汽車に乗つて行く自分を頭腦に描いても見た。「誰れか好い配偶者がありさうなものだが……しかし前の男とさういふ風になつて居てはねえ」こんなことを言つたある友達の言葉も繰返された。

「何うも不思議な縁さね、君」

清が言はうとしたのを山崎が先づ言つた。

女達が本堂に自炊生活をして居るさまも、清の眼には意味深く映つた。町に使ひに行くお國さんや、子供を抱いて出て来る敏子などを、このさびしい田舎寺の本堂に置いて見ることが、清にはめづらしくもあり面白くもあつた。

「自由にやる方が好いさ。自由といふものは辛いものだが、一方にはまた面白い處があるものだよ。かういふ自由は藝術をやるものにはかり許されるんだ。普通の女には容易に得たいたつて得られない境でせう」

山崎に向つては、

「日本にもあゝいふ女の藝術家がドシドシ出来るやうだと

好いねえ、」

などと言つて笑つた。



敏子は成たけ子供を乳から離すとに心を碎いて居た。むつがつて膝に抱つて来るのをわざと叱つて見たり、乳房に唐辛子をつけて飲ませない工夫をして見たりした。しかし寺の上さんには容易に馴染みさうにも見えなかつた。何方かと言へば主僧には抱かれて行つた。

「子供の好きな人は矢張解るのね」

お國さんはかう言つた。

しかし寺の娘には段々馴れて行つた。廣い庫裡の玄關で近所の娘達とお手玉などを取つて居ると、其處へお國さんはわざと子を抱いて来て置いて行つたりなどした。後には娘の背にも負はれて行くやうになつた。

西風の吹く日が多かつた。朝は好い日和で、今日こそ大丈夫と思つたやうな日にも、午後からは大抵林が潮のやう

に鳴つた。夜は敏子は一人では決して本堂の一間に留つては居なかつた。お國さんが庫裡に来ると、いつでもその跡について来た。「だつて怖いんですもの。よく貴方怖くなくつてね」いつもかうお國さんに言つた。

清が歸るといふ日、二人はこれから利根川に行つて見るなどと言つて、頻りに辨當を拵へて居た。



五十四

寺の本堂に一月以上も居た女達は、いよく歸る支度を  
 した。子供のすつかり馴染むのを待つて居ては際限がない。  
 別れた當座は少しは難かしからうが、もう物を食ふやうに  
 なつて居るから、如何やうにも世話が出来る。主僧も上さ  
 んもかう言つて子供を引受けて呉れた。

若い母親と子供との別れは辛さうであつた。毛の薄い坊  
 主頭を撫で、眼を赤くして居ることもあれば、抱いたまゝ  
 柱に凭り懸つて、一人物思はしさうにして居ることもあつ

た。「矢張、別れるのは辛いものねえ」わざと平氣な調子で  
 言つても、其言葉の底には深い悲哀が籠つて居た。

お國さんは成るだけ其話をしないやうにして居た。

前の日にすつかり荷物を包んで、それを停車場に運んで  
 行つて、汽車便に託した。歸る時、二人はふとこんなこと  
 を語り合つた。

『さうしませうか』

『さうしませう』

『その方が汽車で唯歸るよりは面白いわねえ。』

『そして矢張一日で行けるんでせう。』

『それはさうよ』

二人は利根川を汽船で歸るといふことをふと思ひついたのである。此間、散歩に行つた時、土手の上から溶々と流



れる利根の流を見て、「いゝわねえ、船で歸ると好いわねえ」と言つた。二三日前には、此處から一里半位しかない河岸まで汽船が毎日上つて來るといふ廣告の札を町の通の板場で二人は見た。

翌日の午前の八時頃には、寺の庫裡の入口の前に車も二臺來て待て居た。一番先にこつそりと本堂の方から廻つて出て來たのは敏子であつた。「暫く庫裡の壁の處にその瘦せた姿と白い顔とを見せて聞耳を立て、居たが、家の内から豫期した子供の啼聲も聞えて來ないので、いくらか安心したといふ風で、ホツと呼吸をついた。其處にお國さんがソツと出て來た。

「何うして？」

「大丈夫よ」

「お上さんが連れて行つて？」

「え」

お國さんは點頭いたが、「行きませう。」かう言つて逸早く車に乗つた。敏子も急いで車に上つたが、其處に主僧は奥から出て來て、「それぢや、心配しないで……」かう言つて別れを告げた。車は朝の晴れた日影を受けて、梅の花の盛を過ぎた垣に添つて山門の方へと出て行つた。敏子（後）に子供の啼聲が聞えたやうな氣がした。

一時間後には、二人は利根川のある河岸に立つて居た。其日は水の都合で、汽船は其處まで上つて來なかつた。二人は他の四五人の乗客と一緒に、端舟で一里ほど下の河岸まで下らなければならなかつた。やがて端舟はお納戸の色をした繪のやうな流を靜かに下つて行つた。



行着いた河岸には、一隻の汽船が薄い黄い煙を煙突から出して、白いペンキ塗の船體を四邊に浮出す様に見せて居た。

清が二十五六年前に故郷から都へ出て行つたのも矢張この河岸からであつた。其時分の大きな椎の樹は、今も其河岸の埠頭の傍に濃い深い蔭をつくつて居るが、その下の茶店に、女達は汽船の出るまでの間を、子供の話などをしてから待つて居た。

## 五十五

郊外の丘の家に二人が歸つて來てからまた一週間も経たないある朝、雨戸を明けたお國さんは吃驚して聲を立てた。其處には馬橋が立つて居た。

「えらい處に居るんですねえ」

かう言つて、馬橋はヅカヅカ上つて來た。思ひ決めたやうな眼色をして、遁けたツて遁がさなはいといふ風が明かに見えて居た。お國さんは何うすることも出来なかつた。暫しは誰も口を開かなかつた。敏子は衣裳を着改へに四



壘半に行つた。お國さんは蒲團などを疊んで押入に入れた。馬橋は立つて居た。

「何うして、貴方、來たの？」

やがて敏子は四疊半から出て來てかう言つた。眞面目な顔であつた。

「少し話しがあるんだ」

馬橋は顔を赤くして笑つて見せた。

「今更、こんな處に來て下すつちや困りますわねえ」

「だつて仕方がないさ」

馬橋はかう言ひながら坐つた。また笑つて見せて、

「それにしてもえらい處に住んで居るんだねえ」誰に言ふ

でもなくこんなことをまた言つて、「随分探した——」

一座はまた黙つた。

「でも、困るわ、……話があつたつて何だつて、こんな處に來て下すつては……」

暫くしてかう言つた敏子の聲はやゝ和かにやさしくなつて居た。

「話があるなら、何故先生の方に仰しやつて下さらないの？」

「先生に言つたつて仕方がない。二人のことは二人で處分するより他には方法はないから」

「もう處分したんぢやなくつて？」

「まだしやしないさ……。一時、都合で別居して居たばかりなもの」

「ぢや、何故あんな手紙を寄したの？」

馬橋は鳥渡行詰つたが、「だつて、我々の間はあんな片々



たる手紙で物事が定るやうな間ぢやないんだから」  
 「ぢや、何故、黙つて今まで放つて置いたの？ 子供のことが決つて了ふまでも何故黙つて放つて置いたの？」  
 「だつて居る處が解らんし、……それに何處かに行つてゐたんぢやないか」

お國さんは何だか二人の對話を聞いて居るに忍びないやうな氣がして、勝手元の方へと行つた。人のことだが、敏子の應對振も何だか甚だ齒痒いやうにも思はれた。あれほど愛想をつかして自分から出て來た徑路とも甚だ伴はなかつた。

飯を炊きながら、障子を隔てゝ、お國さんは二人の對話を聞いて居た。話は絶えたり續いたりした。高い聲が俄かに低い聲になつたりした。「今一度、考へ直して呉れ」かう

言つて間を置いて、「二人の間はこんなことで終つて了ふやうなものぢやなかつたんだから。本當に僕も悪かつた。今度は眞面目に今一度新しい生活に入つて見たいと思ふから」かうした男の言葉が女の低い聲に交つて聞えた。

かと思ふと、途絶えたやうに二人は黙つて了つた。

「YesかNoか。それを本當に聞かせて呉れ。……今すぐツて言ふ譯ぢやない。二三日の中で好いから」

低い會話の中に、男のかう言つた言葉が際立つて聞かれた。

馬橋は三十分ほどして歸つて行つた。お國さんは支度の出來た朝飯をやがて其處に持出して、茶碗やらお椀やらを茶湯臺の上に並べた。

お國さんも敏子も黙つて居た。



朝飯の途中で、敏子は突然「でもねえ今更ねえ。そんなことは出来はしないわねえ」  
「兎に角、先生の處に行つて相談をする方が好いわ」お國さんはかう勧めた。

五十六

「さう度々遣つて来るやうでは、何うか處分しなくつちや  
いかなね。……今更歸つて行かれる譯ぢやなし、貴方の爲  
めにも折角新しいライフが開けやうとしてゐる矢先なんだ  
から」  
清がかういふのを聞いて、敏子は低頭して黙つて居た。  
それは馬橋が来たといふ話をしてから三度目の訪問の夜で  
あつた。始の時は時を移さずNOといふ簡単な端書を敏子は  
出した。すると馬橋は其翌日またすぐ丘の家に通つて来た。



女の心を動かす爲めにかねは總ての力と總ての方法とを用ゐることを辭さなかつた。別れて居る間の日記を持つて来て読んで聞かせたり、孤獨のさびしさをつよさに語つて聞かせたりした。NONNONIONION三度まで女は端書を書いた。しかしその効は遂になかつた。「いくらNOと言つても決してこの心は捨てない。また假令何んな處に身を隠さうとも、屹度さがし出してあとをつけずには置かない……。一生屹度あとを追廻すから、その積でお出なさい」後にはかう脅迫がましいことも言つた。かと思ふと、子供の誕生日を下宿屋の二階で泣いて暮したことを染々とした調子で話して聞かせた。容易に解け難い二人の間柄を人々は思はない譯には行かなかつた。

「貴方の思つて居らつしやることをすつかり先生に仰しや

つて了と方が好いわ」

傍に坐つて居たお國さんはかう言つて敏子の方を見た。

敏子はそれでも黙つて居た。

清はやゝ激した調子で、「だって、今更そんなことを言つて居られる場合ではないぢやないか。僕は何も考へることもないと思ふがね……」調子を變へて、「それとも貴方に今一度歸らうツて言ふ氣があるんですか」

「いゝえ、さうぢやないんですけれど……」

「ぢや、何もそんなに考へる必要はない。貴方さへ決心がついて居れば、馬橋が毎日遣つて来たツて差支がない譯だ……。それは本當に貴方の爲めを思つて僕は言ふんだがね、さういふ場合に決斷がつかない爲めに、悲劇に陥つて行く人は世の中にくらもある。現に僕はいくらもさういふ例



を知つて居る。一度決心した以上は、迷はずに、どんく先に出で行かなくては仕方がない」敏子の顔を見て、「それに一體、馬橋もけしからんさ。女の處にすぐに出かけて行くと言ふ法はない。つまりかういふことをするのは本能を利用しやうといふ一種の性質がするんだ。僕は馬橋をつくづく見て居た。最初貴方を誘つたのも、二度目に貴方をつれて身を隠させたのも、皆な今度の遣り口と同じだ。本能——人間の弱點を利用するやうな處が無意識であるかも知らないが、馬橋の性質の何處かにある。貴方もよく考へなくつてはならんと思ふね」

敏子は斜に坐つて、低頭勝にして居た。口は利かないが、時々點頭いて見せた。顔には血が上つて居た。

「本當に、敏子さん、すつかり考へて居ることを言つて了

ふ方が好いですよ」長火鉢の傍に居る細君も傍から口を押された。

暫く沈黙が続いた。

「それとも何か譯があるんですか？」

暫くして清はかう訊いた。その話があつてから、清は再び敏子を真中にして馬橋と並び立つて居るやうな心持がした。子供を離した後にかういふことが湧いて出やうとは全く思ひ懸けなかつた。

「いゝえ、別に——譯つて無いんですけども」敏子は少し言淀んで、「可哀相に思ふには思ひますの。私の爲めに、馬橋が一生を犠牲にするやうなことがありやしないかと思つて」

「そんなことを考へて居ては駄目だね」かう言つた清の聲







避ける方法はいくらもあるぢやないか。僕の家に来て居てもよし、一時國に歸つてもよし、國に顔が出せなければ何處か田舎に行つて居てもよし、何も困ることは少しもないぢやないか」敏子が黙つて居るのを見て、「兎に角、今一度歸るやうなことがあるならば、僕はもう其巴渦の中に入るのは御免だ。さうなれば、僕と貴方がたとの間は路頭の人だ！」

敏子は點頭いて見せた。

「本當に、よく考へて見て、すつかり決心した處を話してお了ひなさる方が好いです」

細君がかう言ふと、

「それはねえ、奥さん、私だって、一緒にならうつて言ふんぢやないんですの。唯、度々違つて来て困りますもんで

すからねえ」

「馬橋さんも困つた人ね」

一座また黙つた。洋燈が明るく一間を照した。敏子の顔には心の動搖が明かに見えた。

「女が男に一度節操を許した以上、それが一生の運命となるものだといふことを私はつくづく考へずには居られないねえ」

暫くして清はこんなことを言つた。

其夜は十時過まで話して居た。しかし遂に纏つた話もなかつた。兎に角、小石川の兄さんの處に行つて、今夜のことを話して、相談して見るといふことになつた。清の意見は歸國説であつた。迷つてはいけな。折角出て来た新しいライフを捨て、後戻りするやうな愚は取らない。決断が



肝心だ。かうしたことを清は繰返して言った。  
 敏子は多く口を開かなかつた。顔も蒼白かつた。歸る時  
 『それぢや、先生、兎に角明日小石川に行つて相談して來ま  
 すから……。いろいろ御心配をかけてすみません』かう言  
 つて、清の顔を見て、そして別れをつげて行つた。夜は暗  
 かつた。

お國さんも敏子も長い間黙つて歩いた。

五十七

一夜、雨が盛に降つて居た。

十一時が打つたので、もう寝やうなどと言つて居ると、  
 垣の外で、

「奥さん、奥さん」

と呼ぶ聲が雨の音に交つて微かに耳に入つた。

「あれ、お國さんだよ」

細君は返事をして置いて、直ちに婢に裏門の戸を明けさ  
 せた。やがて傘にはらばらと雨の當る音がして、衣服を高



く端折上げたお國さんの顔が、一枚明けた雨戸の縁側の處に白く見えた。

「敏子さんが居ないのですがね」

「敏子が居ない？」

思はずかう反問した清の聲は高かつた。細君も眼を睜つた。

「私、今朝姉の處に行つて、今歸つたんですが……戸が閉つて、家内が眞暗なんですの。私のあとで敏子さん出かけて行つたにしても、もう十一時ですからね、歸つて居ない譯がないんですが……それに鍵は敏子さんが持つて居るんですし」

人々は黙つて四邊を詢した。

「小石川にでも行つたんぢやないか」

「何うですか……それなら、此處に寄つて何とか一寸言つて行きさうなもんですがね」

「それもさうだな」と清は考へて、「戸は何處も明いてないのですか」

「何處か明いて居るかも知れませんが……私何だか怖くなつて、急いで來ましたの……そんなことはないでせうけれど」

死——自殺。かう言ふことが俄かに人々の頭に上つた。

「そんなことはないだらう」かうは打消したもの、矢張清にも多少はその心配があつた。

また暫く黙つた。雨の傘に當る音が耳立つて聞えた。

「まア、お上んなさいな」始めて氣が附いたといふやうに細君は闇の中に立つてゐるお國さんに言つた。



お國さんは雑巾で汚れた足を拭いて、やがて洋燈の明るい室に上つて来た。其顔は蒼白かつた。

「一體何う言ふんです？」

改めて清から聞かれて、お國さんは一伍一什を繰返して話した。馬橋の處に行くやうな素振は今迄にも更になかつた。「まさか馬橋さんの處に行つたんぢやないでせうと私は思ふんですが……私には何うもさう思はれない」お國さんはかう言つた。

人々はまた死といふことを考へた。敏子の平生の神経性から推すと、そんなことはないとも斷言されなかつた。

暫くしてから、清は、

「馬橋の處に行つたに相違ない。……それに相違ないと思ふけれど、念の爲め今一度、行つて見て呉れませんか。そ

して家に鍵がすつかり懸つて居るか何だか見て来て呉れませんか。家に何うかして居るんなら、鍵がかゝつてゐることはないだらうから」かう言つて、室の一隅に坐つてゐる婢に向つて、「お前、お國さんと一緒に行つてやれ」

雨を衝いて二人の出で行つた間を清はじつとして居られなかつた。立て見たり坐つて見たりした。敏子の青白い神経性の顔が見えるかと思ふと、眼の下つた馬橋の笑顔が見えた。死ぬなどはない。それはない。「馬橋の處に行つたに相違ない」かう繰返して思つたが、急に、「馬鹿な奴だ！」と口に出して言つた。

それからぶつとりと口を噤んで、火鉢の縁に肘を立て、頬杖をして、傍からいろいろなことを言ひかける細君の言葉も耳に入らないといふ風をしてゐたが、やがて急に立上



つて、次の間に敷いてある蒲團の上に長く身を横へた。深い長大息の其處から洩れて來るのを細君は聞いた。三十分ほどして女共は歸つて來た。清は其の氣勢を聞くや否、すぐ夜着を跳ねのけて立つて行つた。矢張鍵が外からかけてあつたとのことであつた。

「さうですかねえ。矢張馬橋さんの處に行つたんですかねえ」人の心の不思議に眼を睜るやうにしてお國さんは言つた。

戸外には雨がザンザン降つて居た。

五十八

敏子は其日の午前健を大屋に預けて、お國さんが歸つたら渡して呉れと言つて、風呂敷包を抱へて出て行つたといふ。

馬橋の下宿に行つて居るといふとも二三日して知れた。

「さうですかねえ。矢張行つたんですかねえ。私などにはさういふ心持がまだ何うしても解りません」お國さんはかう繰返して言つた。

「何うせ、また、苦勞するのに定つて居るのにねえ、敏子



さんも損な人ねえ」

細君も傍から言つた。

「それは、何うせ、苦勞するに定つてゐるのさ……。しかし巴渦の中に入つて居るものには、そんなことは考へて居られないからな、さういふ風に熱して來ると、後のことも何も考へて居られなくなるからな」少し考へて、「一體敏子の性質がさうなんだ。其處にあの女の一生の悲劇があるんだ！」

清の頭腦には新たに敏子のことか繰返して考へられた。馬橋の遺口に就いては、かれは一時は動なからず激しても見たが、しかしもう以前のやうな烈しい感情は起つて來なかつた。唯、敏子に對しての深い悲哀と同情とが湧いたばかりであつた。時の力といふものが黙つてしかも有効に人々

の上に働いて居るのを染々と清は感じた。

二三日——一週間——かれは戀の燃えたり消えたりするのをつくづく獨り考へて見る人であつた。毎日通ふ路傍の花園には、遅咲の沈丁花がまだ微かに匂つて居た。

かれはまた周圍を振返つて見た。其前に展けられた人生のパンラマー——それがある處は分明と見え、ある處はボンヤリと霞に包まれて見えた。ある人の心理とある人の心理とがある場合に相觸れて、其處に一種の空氣が出來て來るといふことも考へた。馬橋が敏子に別れてさびしく暮して居る間の煩悶は、少くとも嫉妬憎惡の煩悶であつたことを想像してかれは微笑した。

丘の家に殘して行つた道具を馬橋が取りに來たのは、それから十日ほど経つてからであつた。馬橋は例の袴を穿い







緣  
終

明治四十三年十一月五日印刷  
明治四十三年十一月廿日發行

定價金壹圓五十錢

著作者 田山花袋

發行者 澁川民治郎

印刷者 加藤綱三郎

印刷所 博文館印刷所



發行所 今古堂書店

東京市日本橋區馬喰町三丁目  
(振替東京三〇七 電話浪花四三六)

關西賣捌 杉本書店

大阪市東區北波邊町



# 箏曲樂譜

箏曲樂譜は古今の名曲又は新曲の尤も面白き曲を洋樂の譜に作譜したるものにして、筆は勿論ピアノ、オルガン、ヴァイオリン等にて自由に演奏し得らるゝ様に作られたる良典にして、著者は何れも現代一流の名家の手になれり。家庭音樂流行の際此書の如きは座右欠ぐべからざる寶典なり。

- 秋風の曲……………鈴木鼓村作譜……………定價金五十錢 郵税金八錢
- 思ひ出●紅梅……………鈴木鼓村作曲……………定價金五十錢 郵税金八錢
- 靜……………鈴木鼓村作曲……………定價金六十五錢 郵税金八錢
- 千鳥の曲……………鈴木鼓村作曲……………定價金八錢
- 四季の榮……………山登萬和作曲……………定價金五十錢 郵税金八錢
- 新年の雪民の歌……………山登萬和作曲……………定價金五十錢 郵税金八錢
- 須磨の嵐……………山登萬和作曲……………近刊
- 媛……………鈴木鼓村作曲……………近刊

# 古今堂發行書目

鈴木鼓村 秋聲著 小説 <b>結婚難</b> ●定價金六十錢 ●郵税金八錢	廣津柳浪著 小説 <b>二筋道</b> ●前編定價金六十錢 ●後編定價金六十錢 ●郵税金各八錢宛	楓村居士著 軍事小説 <b>橘英男</b> ●定價金四十五錢 ●郵税金八錢	黒法師著 家庭小説 <b>想夫憐</b> ●定價金四十五錢 ●郵税金六錢	中村春雨著 短篇小説 <b>角笛</b> ●定價金六十錢 ●郵税金八錢	リットン脚原著 翻譯小説 <b>聖人か盜賊か</b> ●前編定價金四十錢 ●後編定價金五十五錢 ●郵税金各六錢宛
--	---	---	--	---	---



目書行發堂古今

橋本清方著 小説 戀愛の犠牲 ●定價金八 十錢	江見清水著 小説 雲かくれ ●定價金六 十錢	廣津柳浪著 小説 横戀慕 ●前編定價六十五錢 ●後編定價六十五錢 ●郵稅各金八錢宛	江見清水著 小説 女船長 ●定價金五 十錢	徳田秋聲著 小説 母の紀念 ●前編定價六十五錢 ●後編定價六十五錢 ●郵稅各金八錢宛	正宗白鳥著 小説 誰の罪業 ●定價金五 十錢
-------------------------------------	------------------------------------	--	-----------------------------------	---	------------------------------------

佐々木清方著  
無名書

修業社

目書行發堂古今

柳川春葉著 小説 心の影 ●定價金七 十錢	江見清水著 小説 鹿島灘 ●定價金七 十錢	徳田秋聲著 小説 落し胤 ●定價金六 十五錢	塚原滋柿園著 小説 天草一揆 ●定價金六 拾五錢	齋藤弓花著 小説 残る光 ●定價金六 十五錢	柳川春葉著 小説 新夫婦 ●前編定價金七十錢 ●後編定價金七十錢 ●郵稅各金八錢宛
-----------------------------------	-----------------------------------	------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------	--



厚内板任、経済政策、  
 5- 五ヶ年計画、経済、近況、  
 大正新書刊行

目書行發堂古今

大町桂月著 一枝の筆 ●●定價金四十五錢 ●●郵税金六	柳川英朋齋著 春葉集 ●●定價金四十八錢 ●●郵税金六	德田半古齋著 焰 ●●前編定價金五十錢 ●●後編定價金五十錢 ●●郵税金六	岡田三郎助齋著 新家庭 ●●定價金七十五錢 ●●郵税金八	廣津柳浪齋著 復讐 ●●前編定價金七十錢 ●●後編定價金七十錢 ●●郵税金八	德田清方齋著 女の秘密 ●●定價金六十五錢 ●●郵税金八
--------------------------------------	--------------------------------------	---	---------------------------------------	--	---------------------------------------

目書行發堂古今

大町桂月著 閑日月 ●●定價金四十五錢 ●●郵税金六	江見水蔭著 水中の結婚 ●●定價金五十錢 ●●郵税金八	小栗風葉著 春怨 ●●定價金七十錢 ●●郵税金八	中村春雨著 炬火 ●●定價金一十二錢 ●●郵税金一	中村春雨著 犯さぬ罪 ●●定價金八十錢 ●●郵税金八	やなぎ生著 女の望 ●●定價金八十錢 ●●郵税金八
-------------------------------------	--------------------------------------	-----------------------------------	------------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------



目書行發堂古今

生田葵方書著

紅

淚

●定價金八  
●郵税金八 十 錢

渡部秋聲著

多

數

者

●定價金八  
●郵税金八 十 錢

宮崎湖處子著

妻君の自白

●定價金四  
●郵税金四 十 錢

岡本綺方著

維新前後

●定價金二  
●郵税金四 十五 錢

柳川富蘆花作

脚不

如

歸

●定價金三  
●郵税金四 十 錢

柳川春葉著

脚雪子夫人

●定價金二  
●郵税金四 十五 錢

高濱長江著

煉

獄

八

●定價金五  
●郵税金六 十 錢

橋田山花袋著

妻

●定價金二  
●郵税金十 五十 錢

德田秋聲著

同胞三人

●定價金一  
●郵税金十 二 錢

真山青果著

南小泉村

●定價金八  
●郵税金八 十五 錢

柳川春雄著

操

●定價金一  
●郵税金十 四十 錢

真山青果作

憂

●定價金九  
●郵税金八 十 錢

目書行發堂古今

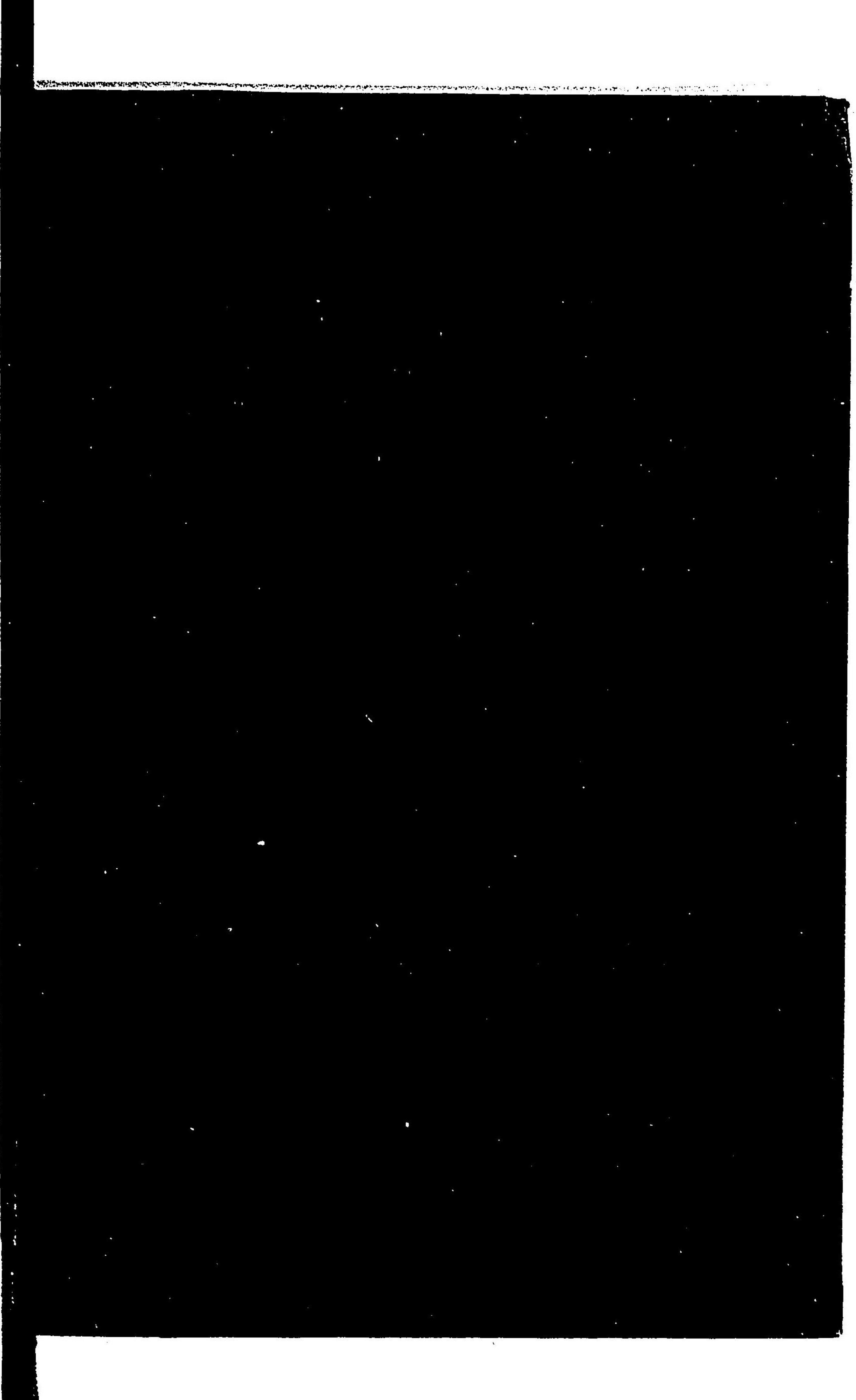






329  
75







329  
75

093014-000-9

329-75

縁

田山 花袋/著

M43

DBQ-0337





34.8.26